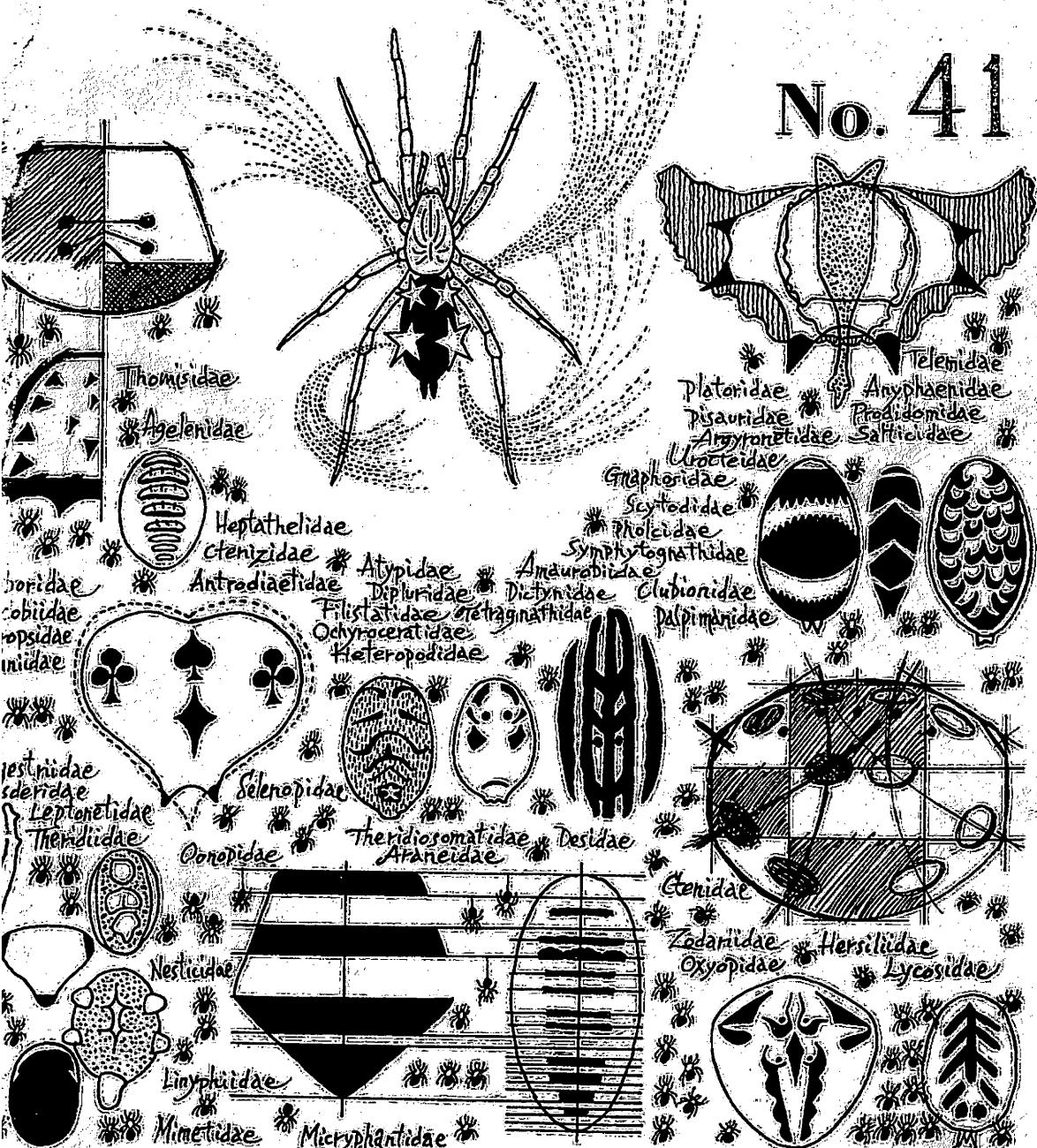


KISHIDAIA

Bulletin of Tokyo Spider Study Group

No. 41



(C 1913)

目 次

ビジ旨オニグモの死	佐藤 幸子	1
ハイイロヒメグモの集団越冬	熊田 寛一	2
小観察あれこれ(6)	高野 伸二	3
野 帐	田中 理恵	5
オオハエトリの飼育経過	鈴木 勝浩	9
自然保護既本とクモの説明	須賀 瑞文	11
クモが人間を水の中に引きずり込む話	須賀 瑞文	12
ハエトリグモの分類(Ⅲ)	松本 賢治	15
埼玉県における採集記録(Ⅱ)	鳴田 順一	21
岩手県好摩のクモ	熊田 寛一	25
DRAGLINE 41		
オオヒメグモを襲ったミスジハエトリ雌	鈴木 勝浩	27
ヤホシヒメグモの産卵からハッチまで	鈴木 勝浩	27
沖永良部島のクモの俗称	小野 辰詞	27
ヨケオニグモに咬まれて	山川 守	27
東北ヘジヨロウグモを求めて	栗原 輝代子	28
クモ標本同定会に思う	鈴木 勝浩	29
東京蜘蛛談話会採集会報告		
日向薬師・広沢寺のクモ	高橋 登	29
八柱観音のクモ	権田 重雄	33
10太ニュース	運営委員会 選	36
KISHIDAIAのバックナンバーあります		59
東京蜘蛛談話会活動報告		40
表紙に寄せて	小澤 實樹	41
編集後記		42

ビジョオニグモの死

佐藤幸子

12月27日午後2時30分。アオキの葉に僅かな糸をかけて上部に止まっていたビジョオニグモが、葉の端に移動して静止していたと思うと、ツと手を離し落下しました。手のひらにのせると、もう死んでいました。蜘蛛が息を引き取る時に立会つたのは初めてなので、何か一日中物悲しい気持ちで一杯でした。

雌のビジョオニグモが、たった一人で私の庭にやって来たのは、51年10月9日(火)でした。雌でしたので彼氏が来てくれるかどうか心配で、年頃の娘を持った親みたいに何かソワソワと毎日様子を見に行きましたが、親の心子知らずでアオキの葉一枚を住居とし、呼糸を長々と張って毎晩元気に網を張って居ました。その時の気分で住居から離れた所に網を張り、朝は例の住居に隠れて右の足一本をチョイと呼糸に掛けています。それでも彼氏はなかなか現れませんでした。

11月10日(水) なにかビジョオニグモのお腹がパッカリと肥ってきたのに気づきました。お腹の中に卵が詰まっているのに違いありません。私の知らない内に彼氏がしのんで来たのでしょうか。期待が大きかっただけに、彼氏に会えなかった事がとても残念でなりませんでした。

11月18日。夜12時近くビジョオニグモがどうしているかと見に行くと、住居から出て近くの葉の裏で大きなお腹をかかえてモタモタして居ります。何をするかとしばらく見ていましたが、やっぱり電燈の光をいやがっているようだったし、私自身も寒さに負けて観察を中止しました。

翌19日。昨夜の葉の裏に卵のうを造り、その上に住居風の網を張りわたし、ビジョオニグモは上側に静止して卵を守って居りました。それから26日までの間毎日少しづつ葉を巻き込み、とうとう葉の片端を葉脈まで接続させました。巻き込まれた葉の中はピッシリと厚い糸でおおわれ、卵のうが保護されていました。

12月16日。卵のうを守る事をやめ、近くに自分の住居を作りましたが、ほとんど1ヶ月何もたべていませんので糸があまり出ません。せっかく裏にかくれているのにスケスケで可哀想でした。

12月24日。此の日まで四回住居を変えましたが相かわらず何もたべません。

12月27日。「卵のうの中でふ化すると、親は何となくそれを知り卵のうを離れる」と聞きましたので、新海さんに相談して卵のうを一寸切り中を調べてみました。中はまだ卵のままでした。もしかしたら無精卵ではないか、という疑が濃くなりました。それなら彼氏に会えなかった理由もうなづけます。とにかくそのまま3月頃まで置いておこうという事になって、BINに入れて納戸の本棚にしまいました。そして親ビジョオニグモのところへ行ってみると、最初に書きました通り、ハラリと落ちて息をえたというわけです。

ここで私にとって疑問がわいてきます。

①10月9日庭に来た時もう交接がすんでいて、11月18日に卵を生んだのか。

②私の庭に住みついてから彼氏が密かに来て交接したのか。

③まったくの無精卵なのか。

④休眠なのか。

3月まで待ってみますが、もし御存じの方がありましたら教えてください。お願いします。（卵の色は乳白色）

ハイイロヒメグモの集団越冬

熊田憲一

テントウムシなどの昆虫ではよく集団越冬についての報告もあり、冬季の採集でもそれらを見うける事が出来ます。しかし、クモの集団越冬については、キノボリトタテグモ・ジグモやクサグモの様に住居内や卵のう内で化し、そのままの状態で越冬しているほかは知られていない様に思われます。

私は1977年3月6日に神奈川県三浦半島の南端毘沙門付近（通称南海岸）において、ハイイロヒメグモの集団越冬を観察したのでここに報告します。

観察場所は海岸より海蝕崖に至る平坦地で、ススキに似た植物が生えており、そこを焼いて開いたところです。焼跡に残る石の下や石と石とのすき間、木片の下に目の細かい糸を引きまわしたような網を張り、石や木の表面に静止していた。網1つに1～8個体のクモを見る事が出来、1つの石の下（直径20cmぐらい）より20頭前後が見られた。また、火の入らなかった枯草の間にある石の下などでも同じ様にして多数が見られた。大きさは採集品（なるべく大きな個体を採集した）によると、雄は亞成体になる前（-2）、雌はそれよりも小さい（-3～-4）ものが多く、現地ではこれより小さい個体もかなり見うけられた。20m四方ぐらいのところで数ヶ所の石や木の下より100個体近くのものを見ることが出来たので、その総数を考えると大変なものになると思われます。

排他的な性格をもつクモが同一種とはいえ、多く集まって越冬しているのを観察したのは初めてです。また、これより先、1972年11月下旬に神奈川県丹沢山塊日向において、山道の両側を3～4回スイーピングした際に10数個体ものハイイロヒメグモが網に入って来た事があり、これにより越冬前にもかなりの密度でいると考えられます。

成体は初夏～夏に見られ、草間などに網を張っています。

小観察あれこれ (6)

高野伸二

○オオヒメグモとアカオニグモの冬ごし

1976年2月21日、北海道野付郡別海町の野付中学校玄関のポーチの屋根の下にいるオオヒメグモを見つけた。指でそっとさわると不活発ではあるが動いた。ここは厳寒期には気温-20℃位になることもあると思われるから、このクモは寒さには相当強いと言える。なおその前日の2月20日には、根室市の風蓮湖畔の建物内の天井で越冬しているアカオニグモ幼生(全長約5mm)とウロコアシナガグモ幼生がいた。建物内であるから野外ほど寒くはないとしても全く暖房を使わない無人の建物であるから-10℃位にはなることもある。アカオニグモは樺太では2年かかる成熟すると言われ、この大きさの幼生は前前年の9~10月に産卵された卵からふ化したものということになるが、北海道ではどうであろう。

○御嶽山のセスジガケジグモ

1976年6月23日都下の御嶽山に行ったところ、頂上近くの人家のへいや石垣にガケジグモ特有のボロ網がたくさんあったので、アリをかけてみたらセスジガケジグモが出て来た。昨年開かれた談話会の合宿の際、山梨県忍野村でもこのクモをたくさん見たので別に気にもしなかったが、新海さんに話したら東京都初記録とのことで、6月25日に新海さんと熊田さんと三人で再び現地へ行き確認してもらった。

なお25日には熊田さんが同地でシロタマヒメグモを発見されたがこれも都初記録。他に若いツノオニグモが10個体ぐらい見られた。

○ムラクモヒシガタグモの糸くり出し

6月19日に高尾山表参道の路傍にある倒木のへこみでムラクモヒシガタグモを探集した。このクモを枯れ枝にはなすとぴったりと足を伸ばして静止し、なかなか見つけにくいが、指でつつくと糸を出してぶら下り左右の第4歩脚を交互に使って蛛疣から糸を出し空中に投げるようとする。糸はジグザグをえがいて空中に飛び、その先が物にふれるとクモはそれをたぐり伝って移動した。多くのクモのようにただ糸を出して風に流すよりもこの方が早く物に達するという点では有効であろう。このクモは枝先から糸でぶら下った時と水平の枝の先の下側にとまった時には腹面を上にした姿勢で、垂直かそれに近い枝の先端にとまった時には腹面を下にした姿勢で、必らず第4歩脚によって糸をくり出した。6月25日に御嶽山で熊田さんが採集した別のムラクモヒシガタグモも枝先からぶら下って、この動作をしたからムラクモヒシガタグモにはこの習性があると考える。

しかし6月27日に八王子市外小宮の枯枝にくつついていたヒシガタグモは全くこの動作をせず、枯枝から糸をひいてぶら下ってもオオヒメグモ等と同じくただ足をひろげて、蛛疣から糸を流すだけ

あった。同属近縁の種でこのようなちがいがあるのであろうか。またムラクモヒシガタグモのような糸のくり出しをするクモがほかにもいるのであろうか。

○1976年のゲホウグモ

1976年7月16日高尾山表参道の道ぎわのタマアジサイの葉柄にとまっているゲホウグモの成体♀を偶然見つけた。一見クモとは思われず虫巣のようであった。後で造網するところを見たいと思い、そのままにして来たが、その夜は雨が降って行かれず、6月20日と23日に同地へ行ってさがしたがとうとう見つからなかった。

7月28日には八王子市外の小宮の丘陵にあるコナラ林の林縁のササの葉についているゲホウグモの新しい卵のうを見つけた。卵のうの外側につけてある赤い糸はややピンクをおびているものであった。附近のコナラの木をさがしたが親は発見できなかった。

10月10日、談話会の観察会の際、松戸の八柱靈園でゲホウグモの幼生5ヶ体が見つかった。私は垂直に近いイヌツゲの枯枝の先端に頭を上にしてとまっていた体長約5mmの幼生を持ち帰った。10月22日、室内に枯枝を固定して放したところ、日中は枝の先端にじっとして動かず、22日夜と23日夜は枝間に糸を引いてそれにとまっていた。24日午後10時に見るとすでに円網を完成し、中央に足を伸ばして占座していた。横糸は細かくて、直径約16cmの円網であるのに下側51本、右横48本、左横48本もあった。24日はガを一匹食べ、翌朝午前4時40分にわく糸を残して網をたたみ、枯枝の先端にとまっていた。25日夜は午後8時造網、翌朝午前5時40分網をたたみ、26日夜は午後6時30分造網、翌朝午前5時にたたんだ。しかしその後は気温が下ったためか網をはらなかつた。造網した3日間、不注意から、また留守をした日もあって、とうとう造網過程を見ることができなかつたのは残念である。



野 帳

田 中 理 恵

○野帳とのてあい

私が初めて野帳に出会ったのは、今から4年前のことである。まだ蜘蛛とのつき合いもなく、植物屋と称する人達と野外に出ることが多かった。その植物屋さん達がよく口にしていたのがこの“野帳”なのである。“やちょう”→“野鳥？”と思っていたら、教えてもらったのは野外観察ノートであった。大きさはポケットサイズのA6判。鉛筆片手に気のついた事を記録すればよいとの話。日頃せっかく植物の名を教えてもらっても忘れてしまい困っていた私は、すぐこの野帳に飛びついた。

○使えない野帳

初めての野帳は単に植物名を列記したものであったが、読み返してみると“観察地の大まかな植物相や季節変化がわかる”という利点があった。そこで蜘蛛観察を始めてからも、野帳をつけ続けた。ところが結果は、野帳が野帳でなくなってしまったのである。記録はしてあるが、ただの列記で内容が掘めない。たいへん不親切な記録だった。参考までに当時の野帳を載せてみる。（図1 実物大）
<どこが不親切か—図1の野帳について>

図1-①日時がはっきりしない。（ページが移った時も、日・時は記入したほうがよい。）

②鳥・植物・蜘蛛を整理して記入していない。

③記録は簡潔であること。（ここではヤマグワの葉に身体をくくりつけ、脱皮したことを記録したつもりであるが、記録が簡単なだけでおたがいの関係がはっきりしていない。）

④図は、わかりやすく詳しく描く。

⑤大きさがこの野帳ではわからない。（体長も記録する必要があった。）

以上から私は“野帳は誰がみても、必要な観察内容はわかるようにしておかねば、自分自身にとってもわからないものになってしまふのだ。”ということに気がついた。

○二刀流

“いつ読み返してもわかるように”これを頭に入れ野帳をつけてみると、以前より私の野帳も記録として生きてきた。（図2野帳）それでもいくつか難点が出てきたのである。

<図2の野帳について>

図2-①観察したこと全部を書かなくてもよい。ポイントをおさえて記録する。

②その場で記録して終りでは、記録が書きすぎてになりやすい。

③鉛筆記録は、2~3年たつと薄くなり読みにくくなる。（野外では鉛筆が手軽でよい。）

せっかく記録しておいたものが消えてしまったり、利用できないものでは困ってしまう。そこで、野帳+記録ノートの二刀流をきめこむことにした。まず野外観察に今までのようポケット判野帳を

利用する。その後、記憶がたしかなうちに観察場所について・記録しておきたい事項を別ノートにまとめてしまう。(図3は、記録ノートの一部)いわばポケット判が外の野帳・記録ノートが内の野帳といったところ。この方法は、二重手間のようであるが、私にとって利点が多かった。まとめる際に野外でどこをみのがしたか、この次どこを観ればよいかがわかる。場所についての再確認もできた。

現在はこの二刀流にリストが加わっている。こうして変化してきた野帳だが、これからも私にとって楽しくかつ利用できる野帳にしていきたい。

くわ 野草園	
エビネ	ラン科 F
アマドコロ	F
オオバギボウシ	ウリ科 葉
クマガイソウ	F
クヌキガシケ	ひかけかで生ている。
ウゲイスカク	ラ すいかずら玉 ぐみのような実
? サンショウ	イサシショウ(やや太?)
ヤマウコギ	
礼拝堂	キンラン 2
ビンズイ	(ヒベリ) にじる)
アナグモ科	S.P.
ワカバグモ	カニグモ科 タッヒ。
	歩脚白色 腹部→黒色
	腹部防禦空氣孔からつく
	(ヤマケワ)
	からは 未だくくりつてあるもよう
	5分以内に変化。
	ちぢまる+ある→葉から 色変化なし
タコトキ?	(タスキ科?)
	ササバキンラン
	葉より下に花がつく。

図1 野 帳 (1974年5月1日 観察—実物大)

○見ていて観ていない

野帳をつけながらいつも感じるのは“野外でいくら目を開いて観察してきたつもりでも、実はいつも肝心な所をみのがしてきている”ことである。自分なりの野帳を使いながら、いつか肝心なことがみられるようになりたいと思う。

“こんな方法もある”という紹介のつもりで書いてみた。野帳についてみなさんから、御助言いただければ幸いです。

1/31 晴 12:00~ 野草園

冬シャクガ♀	ヨヨなし タヌキ 2.5cm
ヒロハヒメクモ ジョロウクモ卵	↑ 1.5cm ミスキー ↓ 8mm
 蛹のう T 蛹のつけねをくくりつける キフシ はずれも落葉 葉がおらないようにする? 葉縁にもつるか。	
① 虫蜘蛛は卵附ねつくる場所を避ぶのでは? うか。	

2/1 晴

ユック	カレハヒメクモ 2
	卵のう 变化なし。

2/3 部室内

ナガコガネ卵のう	かえっていろもやう。
----------	------------

12:20~

コサラケモ S.P.	アズヘネササ 不規則網
コモリグモ科	サンホウ T

2/4 晴

タナクモ科	卵へう T
数・種とも変化	みられない。

3/8 晴

・子虫知らずみられず	卵のうには変化なし。
・ジョロウクモ科	卵のうはカウントに影響。
	すきみなし。

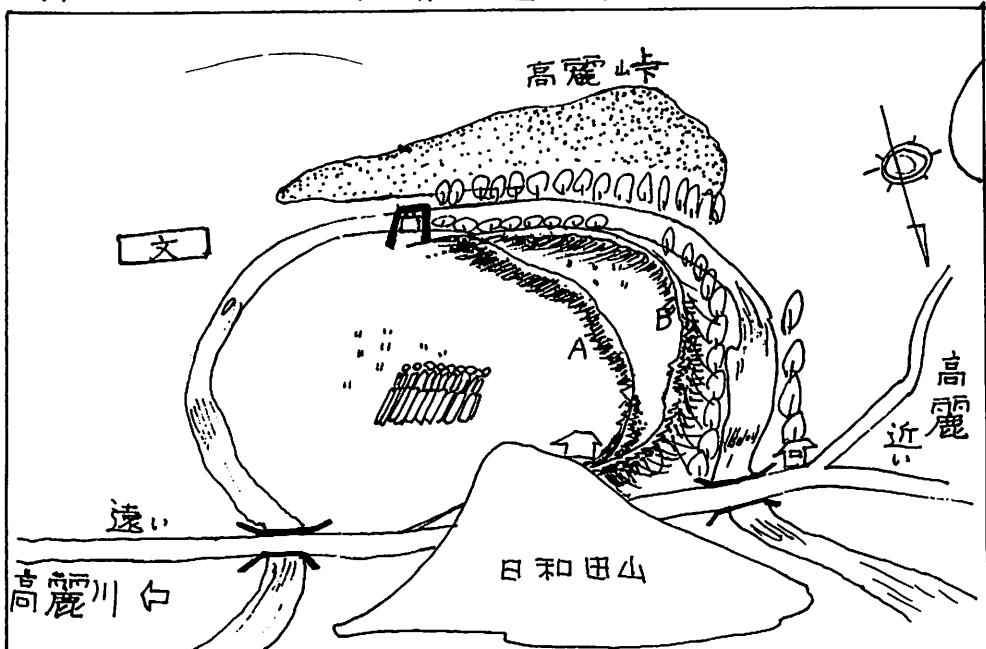
2/10 晴

部室下	体長2m 赤褐色、か丸草をかめた 91%のようだもの
コガネモ科幼生	

図2 野帳 (1975年の記録—実物大)

KISHIDAIA No.41 1977, May

〈16-Ⅹ-1976 埼玉県・巾着田〉 くもり



〈10月の巾着田〉

巾着田の北側に日和田山、南側は高麗峰に続く道がある。川が大きく蛇行してかなり広いきんちゃく形の低地地形ができた。

巾着田内に2道あり、道の周囲は、田や湿地などである。(田や未開草地帯。)

この時期は、草丈は低い方だ 50~70 cm 程度。しみていて、セリ科、単子葉類が多く、草の表層部は枯れていた。

なし層にもかすな、た草をピンセットでかいて開くとコサラ類がみつかる。その成体が多かった。

草丈 50~70 cm 前後の所では、ドヨウオニグモがめについた。

川の付近など、いたる所にアシナガクモ科の幼生が出現していた。(クク、ススキなどの所) → 11月の巾着田へ →

イカラシバ
エノコロクサ



カビフサ

コヌカクサ

カニツリフサ

カヤツリグサ

カヌムクニ

ヤブマオ

ススキ セリ科

(アカネ) アマチャズル

オナモミ

ママコノシリカゲイ

ソバ



トコロ

オオハエトリの飼育経過

鈴木 勝浩（春日部高校1年）

今年の4月から継続して、オオハエトリの生態をわずかではありますが観察することができました。飼育は5月に野外より採集してきた成体の雌雄を中心におこないました。飼育ビンは、底面の直径10cm、高さ8cmの透明なビンを使用しました。餌としては、主にキイロショウジョウバエを与え、水は脱脂綿にふくませ、毎日とりかえました。

以下にオオハエトリの飼育結果を中心に記していきます。

- 求婚ダンス 雄は雌に向かって求婚ダンスをします。その方法は、雄は第1脚を両方共垂直に上げ、腹部を上に曲げて、雌のまわりでダンスをします。腹部は普通のときより30°～60°ほど上がっていました。
- 交接 雌の上に逆向きの姿勢で雄が乗り、雄は雌の脚をおさえ、腹部右側が上方になるようにねじっていた外雌器に触肢をあてます。触肢が動くたびに左第4脚と左第1脚が動きます。触肢の交替はみられません。交接時間は1時間ほどでした。交接後雌は雄を捕食しませんでした。
- 産卵 交接後5日で産卵をしました。産卵の方法は、はじめに皿状の糸を張り、そこに産卵します。これが終ると卵を糸でおおい、さらにその上に一層の糸を張ります。またさらにその上に糸を張ります。この糸でできた層の間は、親グモがはいれるくらいです。（図1）
- 卵のう保護 保護中の雌は、住居外へ出て摂食をしました。排泄も外で行いました。
- 孵化 産卵後15～18日目に孵化し、さらに15日ほど住居内にいてから、産室から出ました。
- 2度目の産卵 第1回目の産卵から約54日後に2度目の産卵をしました。この卵も約30日かかるて産室外へ出ました。
- 母グモの死 2度目の子グモが産室外へ出てから3日後、飼育をはじめてから102日後に母グモは死にました。

今も、第1回目と第2回目の子グモを8頭飼育していますが、共に亜成体です。

6月9日に産卵されたもの・・・第9令（体長8mm）

7月23日に産卵されたもの・・・第4令（体長4mm）

これまでの飼育観察から次のことが考えられます。

1. オオハエトリは1回の交接により2回の産卵が可能である。
2. 私は樹皮の裏で成体越冬・幼生越冬のものを観察している。飼育から考えて、少なくとも1年は生存可能なようだ。

文末ではありますが、いつも懇切に御指導くださっている松本誠治先生に、厚くお礼申し上げます。

表1 オオハエトリの飼育経過

(—|— は脱皮)

月 日	6/8	7/10	7/23	7/31	8/11	8/20	8/27	9/4	9/16	12/1
経過										
産卵										
出ろ										
2令										
3令										
4令										
5令										
6令										
7令										
8令										
9令 (亜成体)										
越冬										

注： 9月20日から1ヶ月間ほどエサを与えることが出来なかった。このため成体になれなかつたのかも知れない。

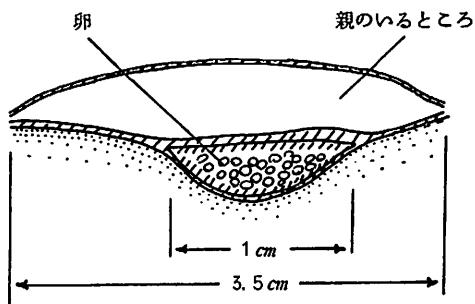


図1 産室

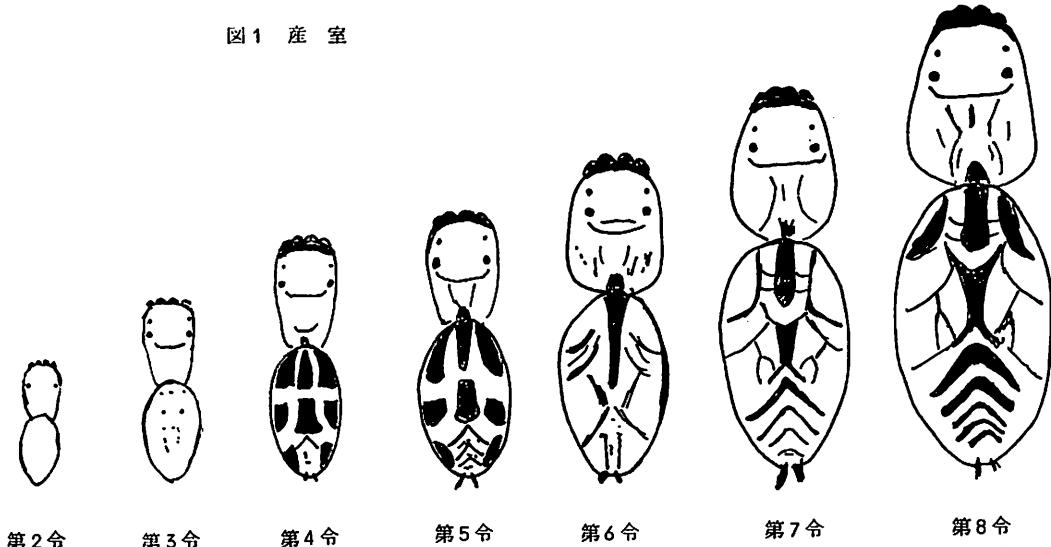


図2 オオハエトリの成長過程

自然保護読本とクモの説明

須賀英文（名古屋市）

最近、全国都道府県（市）等から、主として小・中・高校生向きの自然保護読本が出版されていることは周知の通りであり、また喜ばしいことでもある。

ところで、私の手もとにも現在5種類のものがあるが、私たちクモに興味のあるものにとってのクモに関する説明はというと下記のように他の動物にくらべて大変さびしいかぎりである。

	発行年	クモ	コン虫	魚類	両生類	ハ虫類	鳥類	ホ乳類
わたしたちと自然（兵庫県） —自然保護読本—	S 48	×	○	×	×	×	×	△
鹿児島の自然（鹿児島県）	S 49	○	○	×	○	○	○	○
中学生のための自然保護読本 (山梨県)	S 49 二刷	×	○	○	○	○	○	○
自然保護読本（北海道） —私たちの自然—	S 46	×	○	×	×	×	○	○
愛知の自然と私たち（愛知県）	S 50	×	○	○	○	○	○	○

以上のような状態であるが、鹿児島の説明でも、ナガコガネグモの写真にジョロウグモ（地方ではコガネグモ類をジョロウグモと呼ぶ人は多いのではないか。愛知県の人でも多い。）と説明がつけられてあるし、写真の天地が逆でクモが頭を上に向いている等の誤りが見られる。（この点は、筆者の指摘により49年改訂版では訂正されているものと思うが……。）しかし、小・中学生向きには面白い読みものとして次のような説明があるので紹介しておく。

— クモのなかま —

クモはからだのようすなどから、こわいもの、気味の悪いものとして、きらわれていますが、人間にとて、とても役に立つ生きものです。へやの中でときどき大きなクモを見ることがあります。鹿児島では「ヤツデコッ」と言っていますが、ゴキブリなどをエサにして生きているアシダカグモというクモです。みなさんは、「ヤマコッ」をとってきてクモ合戦をして遊んだことはありませんか。加治木で行なわれるクモ合戦は、全国的に有名ですね。あのクモ合戦に使う「ヤマコッ」は、コガネグモというクモの雌です。

花に集まる小さなこん虫をとらえて食べるハナグモ、ハエをとるハエトリグモ、網にかかったごみなどを網の中央に集めるゴミグモなどもいます。

このほか、オニグモ・ジョロウグモ・ササグモなどがいます。

さて、全国の都道府県で発行されているこの種の読本はまだ多くあるはずであるが、はたしてクモの記事はどのくらいあるだろうか。クモはコン虫にくらべて、これらの面でもまだまだの感があるようである。

クモが人間を水の中に引きずりこむ話

須賀瑛文

クモが人間を池・川・滝などの水中に引きずりこむ民話は全国各地に残っているらしい。最近、名古屋地方の民話を集めた本が出版されたが、そこにも下記のような話が紹介されている。

大池の蜘蛛

むかし、尾張国、前津中の切に、富士見ガ原という高き所がありました。東の方を、見渡せば、^②猿投山、大草山の間に富士山がかすかに見えたとか。その一かく前津小林の里（今の中区大池町あたり）にこうじヶ池がありました。名古屋の郊外にある池としては、最も大きな池であったから、皆が昔から大池と呼んでいました。池の回りは、一キロほどあり、四季いつも満々と水があり、周囲の土手には、柳の木が緑の糸を垂れ、桜の木も交っていました。四方の眺めはかくべつで、名古屋衆の春は摘草、夏は納涼、秋は名月観賞地として名高く、池は舟遊び、釣魚のところとして知られた所でもありました。

しかし、池の近くに住む人は、池のどこかに大きな蜘蛛が住んでいて、それが池の主で、見た者にはたたりがあるという言い伝えを信じておりました。

ある日のことです。元古井の浅野伝七という人が、「今から大池に釣をして来ます」といって家を出ようとすると、その老母が、「せがれや、気をつけなさいよ。あの大池には、古く

から蜘蛛が住んでいるから。池の主を見るとその人は必ず死ぬというからね」と注意をしてくれました。伝七は、大池につき、土手の芝生に腰かけて、釣りを始めました。足の指先が水にとどくくらいの場所で熱心に浮標を見つめておったそうです。すると一びきの大⁽⁴⁾きな蜘蛛が水の中から出て来て、伝七の足の親指に糸をかけて水の中へ入っていきました。しばらくすると、蜘蛛は、又、出て来て、前と同じように伝七の足の親指に糸をかけて又、水の中に入って行きます。それを何度もくり返していました。伝七は、ふと、大池の主は蜘蛛だという母から聞いた言い伝えを思い出して、これは大変な事になつたと気がつきました。それでいそいで、その親指にかかる蜘蛛の糸を、すぐそばの柳の切株の根元にかけかえました。伝七の足の指先と柳の根元と糸の輪がかけかえてあつたことを知らない蜘蛛は、前どおり出てきて、柳の根元に糸をかけては入っていました。そこは、いくら大池の主でも、人間の知恵にはおよばなかったのでしょうか。蜘蛛が何十回となく繰り返しておるうちに、糸はだんだん太くなっています。しばらくすると、突然ドウドドーと大きな音がして、柳の根株は、引き抜かれて、ザブーンと水の中へひき込まれました。水煙が立ち、伝七はしづくのために全身がびしょ濡れです。もし糸をかけかえて置かなかつたら、自分はくものために水底へ引込まれたに違いないと思った伝七は、背ざめて一目散にかけて家へ逃げ帰りました。家に帰ってからもガツガツ身体がふるえ遂にそれがもとで寝ついてしまいました。伝七は、老母に大池で起つたことを、ありのまま話しますと「困つたことになつた。それはきっとお前を引込みにきたのであろう。お前の知恵でその場の災厄は、うまく逃げることができたが、昔から池の主を見ると、その人は、必ず死ぬという。困つた、困つた。」といひながら母は仏さまにいっしんにおまいりしてお願いしましたが、息子はそれから一週間ばかりしてとうとう死んでしまつたということです。

以上の話に類似の民話を私の手もとにある文献を中心^①～^⑦の項目についてまとめて見ると次頁のようになる。この話はなお全国各地にあるようなので、会員諸兄の手でこの表にさらにつけ加えていくことができれば面白いのではないかと思う。本すじの研究とは若干はなれることではあるが…。

池・川・滝等の名称・場所		③足に糸をまかれる人物名	④クモの種や大きさ	⑤糸をまかれた部分	⑥足にまかれた糸をかけかえた植物名	⑦登場人物の生・死	参考文献名
①名称	②現地の地名						
こうじヶ池 別名大池	愛知県名古屋市中区大池町あたり	浅井伝七	大きな蜘蛛	足の親指	柳の切り株	死	ふるさとを訪ね民話を読む会著：おかあさんが集めたなごやの民話
浅井池 東浅井村	愛知県一宮市浅井町	源兵衛 (百姓)	くも (すっぽんのばけもの)	両足	かまで糸を切りとる	行くえ不明 (死?)	福田祥男編： 愛知のむかし話
東浅井の池 浅井村浅井	愛知県一宮市浅井町	源兵衛 (百姓)	一匹の蜘蛛 (すっぽんのばけもの)	足	——	——	福田祥男著： 新編愛知県伝説集
宇連川のひめ淵	愛知県南設楽郡鳳来町	石を捨いに来た人	大きなくも	足	流木	生	鳳来町教育委員会編： 鳳来町誌民俗資料
白川村の小白川の淵	岐阜県大野郡白川村小白川	太郎	小さな蜘蛛	足	クルミの木の切株	生	小島千代蔵著： 飛驒の伝説
淨蓮の滝	静岡県田方郡天城湯ヶ島町	基助 (百姓)	女郎蜘蛛	足	桑の古株	生	小笠好恵編： 東海道の伝説
淨蓮の滝	静岡県田方郡天城湯ヶ島町	与市 (農夫)	ジョロウグモ	足	切株	生	八木沼健夫： クモの話
広瀬川の淵 かしこ淵	宮城県仙台市	ひとりの男	黒い大きなくも	足首	やなぎの株	?	浜田広介監修・執筆： ふるさとの話
かえらじの滝	?	若い木こり	女郎グモ	足	きり株	生	川崎大治選： 日本のおばけ話

- (参考) 1) クモについては大きなものあり、小さなものあり面い。
- 2) 足にまかれた糸をかけかえた植物も地方によって異なっている。
- 3) 第二話的な続編があるものもある(浅井池・淨蓮の滝)し、宗教的な落ちになっているものもある(白川村)

ハエトリグモの分類(Ⅲ)*

— 日本産稀少ハエトリグモについての資料 —

松本誠治**

(杏林大学医学部生物学教室)

日本における稀産ハエトリグモ数種について、その原記載および記載文の訳、並びに注解を示しておく。訳については、博友社の木村・相良「獨和辞典」(1963年版)を主に用い、逐語訳に努めたが、原文が古い文体を使用していたり、かなり大胆な省略文を用いていたりするところもあるので、原意をどれだけ忠実に示せたか心配である。本学講師富野勝・小菅善一両氏にはドイツ語について、種々御教示を願ったが、訳についての責任は全て筆者にある。誤訳などについてご指摘いただければ幸いである。また、これらの記載内容に合致するハエトリグモが発見されることを望む次第である。

1. *Euophrys aninotata* Bösenberg et Strand, 1906 ワカバネコハエトリ

原記載: Bösenberg, W. u. E. Strand (1906) Japanische Spinnen. Abh. Senckenb. naturf. Ges., 30: 338-339, Taf. 9, Fig. 143, Taf. 14, Fig. 367

訳: 体長♂ 4.5 mm. ♂, 頭胸部においては、頭部は緑色がかった黄色、前列眼上に暗褐色の細い帯がある、一方第3列眼のまわりに白色の毛の輪があり、またさらに黒色色素の輪で第3列眼は囲まれる。胸部は褐色味のある黄色で、2つの大きな暗褐色の斑紋があり、またその間には1つの白黄色斑を持つ。さらに第3列眼の間に1対の丸い暗褐色の斑紋がある。ふちは前方褐色、側方は黄色で、細い黒色の線でふちどりされている。胸板は褐色味のある黄色あるいは淡褐色。上顎は淡褐色で、内縁に1本の暗褐色色がある、また同様な条が、上顎の中央にずっと、上顎の半分のところにまで引かれている。下顎と下唇は淡褐色。触肢は、褐色の跗節以外は黄色。歩脚は淡褐色で、第1脚は第2脚よりも2倍強大で、腿節には前方と後方に幅広い暗褐色の縦条があり、胫節には基部と両側に暗褐色斑を持つ。第2・3脚では、腿節は前方にのみ縦条があるが、第1脚のものよりも細い。第4脚は全て一様に淡褐色である。

腹部背面は、白黄色で褐色の心斑と、同様な側条を持つ(Fig. 143)。腹面は、褐色味のある黄色で、中央にはずっと褐色の幅広い縦条を持つ。糸疣は、褐黄色で細い黒色の輪によって縁取りされている。

Dönnitzは、本種を佐賀で発見し、生きていたかあるいは非常に新鮮な標本かを次のように記述している:

* Material for Studies on Rare Japanese Salticids.

** Matsumoto, Seiji : Dept. Biol., Kyorin Univ., 476 Miyashita, Hachioji, Tokyo 192, Japan

♂，全長 4.54 mm。頭胸部 2.09 mm。緑色味のある白色で、黒色と灰色の模様を持つ。背面の模様は、生えている毛のみによって作られている。頭胸部の後方には、1つの幅の広い槍状の白色斑紋があり、その斑紋は、後方では2つの大きな黒斑によって、また前方では灰色の斑紋によって、はさまれている。第3列眼から、前内方に向って1対の小さな黒色の斑紋がでている。ふちは細い黒線によってふちどられている。胸板は黄色味がある。腹部背面は、その前半分で、1つの小さな黒色の対をなさない斑紋を示し、その後方に1本の黒色の中央縦条を、それに伴ない1対の黒色の側条を示す、その側条は後方に向って互いに離れてゆき、それぞれ、傾斜した黒色条斑のところで終る。さらにその後方に、3対の短かい黒色の傾斜した条斑と、糸疣の上方の黒斑がある。腹面は、褐色味があり、暗褐色の中央縦条を持つ。書肺の蓋は黄色。上顎は淡褐色で、暗色の彎曲した線を持つ。下顎と下唇は淡色で黒色のふちがある。歩脚の前3対の腿節の前側は、1本の黒色の縦条によって描かれており、それらの幅は第1脚から第3脚へ細くなる。膝節は淡色。脛節の内側には基部と先端に黒斑がある、第4脚には薄い斑紋らしいものがあるにすぎない。跗節の末端部は黒色。歩脚はかなり長い棘が多く生えている。体の表皮上にかなり多数の細い黒色の毛が直立しており、その毛はまた体の付属器上にも生えている。佐賀、1882年5月14日。やぶの明るいところで採集。

注：本種の標徴は、Taf. 14, Fig. 367BのTibial apophysis も含めて、マガネアサヒハエトリに該当する部分が多いが、マガネアサヒハエトリでは腹部下面の黒色縦条が明瞭な個体では、第4脚の腿節にも側条の現われる個体が多い。なお、千国安之輔氏による「日本アルプス山系の蜘蛛」PP. 151-152, Pl. 19, Fig. 2 のワカバネコハエトリの♀は、図から判断するとメガネアサヒハエトリに似ている。

2. *Ictidopus pupus* Karsch, 1879 キハダハエトリ

原記載：Karsch, F. (1879) Baustoffe zu einer Spinnenfauna von Japan. Verh. naturh. Ver. preuss. Rhein. u. Westfalens, 36: 85-86
訳：♂。この種は *Hasarius* Simon への移行の状態にあるが、Simon が「背面の模様は、生えている毛によって、単に作り出されている」といったこととは、この種には全く適合しない。

全長 5 mm。第3・4脚の膝節と脛節の合長はそれぞれ 2 mm。第3脚の蹠・跗節の合長は 1.9 mm、第4脚のそれは 2 mm。頭胸部は橢円形でかなり高く盛り上り、後方は弱く傾斜する。第1列眼は後曲している、またより大きな中眼はより小さな側眼よりも近くにある、また、中眼の上端接線は側眼の中心よりいくらくか下部で切断する。額は第1列中眼とほぼ同じ高さである。——前体部の地色は褐色味のある黄色、胸部は細い黒色のふちを持ち、頭部は暗色の黒色味のある色を表わし、淡い黄色味のある中断する斑紋を持つ。胸部の中央には、後方に凸になるいくぶんギザギザになった非常に幅の広い黒色の斜めの斑紋が走る。上顎は黒色、牙は基部が暗色になるが黄色味がある。下顎は広い黄色のふちを内方と前方に持つており、基部は黒色。胸板は黄色で、細い黒色のふちがある。触肢と歩脚は黄色であるが、前者では腿節と末節は黒色、後者では第1脚腿節の下面と側面が黒色、全歩脚の脛節は基部と先端が、蹠節は末端が黒色。腹部は卵形、後方末端は尖がる、黄灰色；前部上面に後方に向

う 2 本の分離する黒色の斜条がある、その後近くに 2 つの横帯があるが、それらは中央でつながってはいない、そして、そのそれぞれの内側端からは外側に向って、先細りのする短かい彎曲した帯がでている、その彎曲する帯の後に 1 本の横帯が加わる、また、その後方の中央に、糸疣にまで続く前方でつながり共通の先端を持ち、角をなした斑紋が 2 本ある、その 2 本の斑紋の角は前方に山になる、また黒色の 2 本の短かい横斑があり、後方のものはほとんど点状になるくらい短かい；そこから側方に、つつましい小さな斑点の条がある、その斑点条は前方に延長しており、彎曲した縞まで続いている。腹面は細長い黒色の中央の縦帯で飾られる、縦帯の後端、糸疣の前の両側に非常に細く短かい黒色の斜めの彎曲した条を備えている。触肢の腿節は末節をおよそ 3 つあつめたほどの長さで、また腿節の下面のほぼ中央に 1 つの小さな突起を持つ。 —— Hilgendorf。

注：Karsch (1879) によって発表された本種は、Bös. u. Strand (1906) では *Aelurillus pupus* IC, また Prószyński (1973) では *Icius pupus* という学名が与えられている。検討を受けた中で最も新らしい学名を用いるとすれば、*Icius pupus* (Karsch, 1879) Prószyński, 1973 が該当するが、Prószyński (1973) によれば、タイプ標本は Dahl によって永久プレベラートにされており、詳しく述べてある状態ではないという。その上で氏は、♂の上顎 (fig. 44) と ♂の触肢の構造 (figs. 45–46) を示し *Icius* IC 転属している。これらの図は、メガネアサヒハエトリとの近似を示し *Icius* への転属はメガネアサヒハエトリと同属ということで矛盾はない。原記載をみると、マガネアサヒハエトリともメガネアサヒハエトリとも思えるが、上顎後牙堤に歯のないことはいずれからも区別される根拠になる。Bös. u. Strand (1906) の記載も Karsch が用いたタイプ標本に基づいているため、本種の標本はこのタイプ標本である♂ 1 個のみである。今後原記載に合致する個体の発見が期待される。なお斎藤三郎 (1959) 原色蜘蛛類図説の pp. 155–156, PI. 27, fig 211 にあるキハダハエトリは使用された学名 (*Dendryphantes rubrosquamatus* Dönnitz et Strand, 1906) からは、ネコハエトリに該当する。

3. *Attus basalis* Karsch, 1879

原記載：Karsch, F, (1879) Baustoffe zu einer Spinnenfauna von Japan. Verh. naturh. Ver. preuss. Rhéin. u. Westfalens, 36: 90

訳：♀。体長 5.2 mm, 腹部長 3.5 mm. 第 4 脚膝節+胫節 = 1.8 mm, 第 3 脚膝節+胫節 = 1.2 – 1.5 mm, 第 4 脚蹠節+跗節 = 1.7 mm.

いくらくかずんぐりした体の形から、またその他の点から属の特徴に適合する。前体部は全て黒味がかり、なめらかで、光沢がある。歩脚は黄褐色で、暗色の輪があり、棘を生じる。触肢は一様に淡黄色で、白っぽい毛が生える。下顎は基部は黄色味がかる、胸板は灰黒色味がかる。後体部は灰黒色味がかり、背面基部に短かいかなり幅広い白っぽい縦条がある。腹面は灰黒色、中央部付近の両側にいくらか彎曲した細い白っぽい縦条がある。 —— Dönnitz.

注：Karsch が本種を記載したときには、ハエトリグモ科には 50 属程しかなく、各属の定義も広かったと思われるので、属の特徴に適合するとあっても、それを理解するのは困難であろう。Bös.

u. Strand (1906) は、本種が不明であると著書「Japanisch Spinnen」のP. 343 に記して、学名のみを *Sitticus* (?) *basalis* (Karsch, 1879) という形で掲げている。また Prószyński (1973) も本種の標本が Berlin Museum には発見できなかったと記している。このような現状と簡単すぎる原記載からは、本種の実体は解明困難と思われる。また属名に関する限り、原記載に用いられた *Attus* Walckenaer, 1805 は、*Salticus* Latreille, 1804 の新参シノニムである (Bonnet, 1954~1961) が、その *Attus* から *Sitticus* へ転じられた経緯は明らかでない。

4. *Maevia cylindrata* Karsch, 1879

原記載: Karsch, F. (1879) Baustoffe zu einer Spinnenfauna von Japan. Verh. naturh. Ver. preuss. Rhein. u. Westfalens, 36: 84-85
訳: ♀. 体長 4.5 mm, 中央の幅 1 mm。頭胸部は一様に高く、中央がわずかに高くなる、幅は狭く細長く、ほとんど同じ幅を示し、後方はまるみを帯びて狭まる、また頭胸部は暗褐色で、側縁は黒く、そのへりに平行に細長い黄色味のある条がある。胸板は長円形で褐灰色。触肢は白黄色、歩脚は短かく、白黄色、膝節の基部および脛節の基部と棘、そして蹠節と跗節の棘はきれいな黒色; 第4脚の腿節内側に細い黒い縦条がある; 第1脚腿節と膝節、脛節の内側に幅広い真黒な連続する縦がある。腹部は円筒状で灰色、背面に黒褐色の順序正しい形をした点斑がある、前方中央に1本の短かい縦条があり、その後方に1本の横帯がある、その後には、そこは背面のほぼ中央になる、1つの後方に向って開いた角のあるとがった形の帶が、それから3本の幅の広い前方に広く離れた帶が、また2つより細くより近づいている帶が順次つづいている、これらの帶は前方に向って中凸に彎曲した帶である; これら全ての模様はたがいに側面の点斑によって連絡されている。腹面は糸疣の前のいくつかの点斑と同様に生殖器が黒いのを除いて、一様に灰色である。長い毛の束が腹部の基部の上に生えている。
— Hilgendorf.

注: 本種は Bös. u. Strand (1906) によって、*Telamonia* に転属されている。Prószyński (1973) は、本種学名は "*Telamonia*" *cylindrata* (Karsch, 1879) としており、この引用符の付した理由は、標本の現状が記載に適さないこと、外雌器と牙堤器のみしか詳しく観察できないこと、*Telamonia castriesiana* (Grube, 1861) とは類縁がみられないこと、それ故本種の分類上の位置をきめるのにはもっと標本が必要なこと、をあげている。なお観察に使用した標本は本種の正模式標本と思われる Dahl によって顕微鏡標本にされた ♀ 1 個体 (その標本には、*Orienticus cylindratus* (Karsch) という学名がついている) であると述べている。本種に関するその後の Prószyński 氏の態度は、八木沼 (1977) によって口述紹介された。それによれば 1978 年以内には本種の検討結果が発表されるという。

5. *Anarrhotus nishitakensis* Strand, 1907 ニシタケハエトリ

原記載: Strand, E. (1907) Vorläufige Diagnosen süd- und ostasiati-

scher Clubioniden, Ageleniden, Pisauriden, Lycosiden, Oxyopiden und Salticiden. Zool. Anz., 31: 570

訳：♀。頭胸部は黒色の眼域，胸部上の淡黄色の中央縦帯，淡褐色の側面および黄色味のある側縁近くの帯を持つ。下面全体は白色味があるか，あるいは淡黄色，付属肢は褐黄色，毛は大部分が白色味かかる，頭部は鋸色がかった黄色，まつげは黄色味のある白色。外雌器は水盤状のくぼみを作っている。——10mm。頭胸部は上顎を含めないと3.9mm，上顎を含めると4.2mmの長さ，幅は3.1mm，上顎は1.3mm，左右合せて幅は1.7mm。歩脚：第1脚8.7mm，第2脚8.4mm，第3脚9.4mm，第4脚10mm，第1脚膝・脛節合長は2.9mm，第2脚のそれは2.7mm，第3脚では2.7mm，第4脚では2.7mm；蹠・跗節合長は，第4脚2.9mm，第3脚2.5mm，第1・2脚2mm。——日本：ニシタケ，日向，九州〔ハングル博物館蔵〕

注：本属*Anarrhotus* Simon, 1902に属するクモはRoewer(1954)によれば，本種とマラッカ産の*A. fossulatus* Simon, 1902のみである。Unidentatiに含まれているところから後牙堤歯は1本あるとはいはれられる。体長10mmというとハエトリグモにしては大型であり，横に長い長円形の外雌器の形態も特徴的と思われる。

6. *Silerella barbata* Bösenberg et Strand, 1906 メグロハエトリ

原記載：Bösenberg, W. u. E. Strand (1906) Japanische Spinnen. Abh. Senckenb. naturf. Ges., 30: 372, Taf. 14, Fig. 373A, B, C

訳：体長♂5mm。歩脚の長さ：第1脚6.2，第2脚4.6，第3脚6，第4脚7mm。

♂。頭胸部はわずかに高く，上面ほとんど平らで，後方に向って次第に傾斜する。第1列眼はかなり後曲する；側眼は中眼からほんのわずか離れる。眼方形は前辺と後辺同じ幅で，幅が長さにいくぶんまさる。頭部は頭胸部の表面の約5分の2を占める。頭胸部の幅は第3列眼のところでは第3列眼の幅よりも広く，また第3脚基節で最も広い幅となる。色彩は上面栗色，頭部は他の部分よりかろじて暗い，眼の周囲は黒色。頭部と胸部側面は短かい白色の毛におおわれている，そして前列中眼のへりもまた白色である。卵形で両端でほとんど同様に強くまるくなっている胸板は淡褐色。上顎は褐色で，上牙堤はいくぶん明るくなる。細長い下顎もまた褐色。下唇は暗褐色で長さが幅にまさり，また下顎のほぼ半分の長さである。触肢では腿節は褐色，その他の節は淡褐色，特に跗節は黄色味が入る，その跗節は前の2節よりもわずかに太くなる。毛は長くもなくまた密でもない，しかし脛節内面に生えている毛は実際に目を引く。脛節は太い独特の形をした突起を持つ(Figg. B. u. C)，この突起は容易に種を認識させる。歩脚では第1脚が最も太い脚である。基節と蹠節は淡褐色，跗節は黄色，膝節は褐色，腿節と脛節は暗褐色；脛節は上面と下面に，腿節はとくに末端下面に，それぞれとさか状に密に生えた黒い毛がある(Fig. A)。他の3対の歩脚は淡褐色；第3・4脚では腿節上面，膝・脛節両側は暗褐色の条で飾られる。虹色に輝やく鱗毛が歩脚に，特に前脚腿節に存在する；前脚跗節は内側と前方に純白の鱗毛がある(Strand)。第1脚蹠節は下面に2・2の棘を持っている；そ

れらの内、後者の2本は末端近くにあって前者2本よりもはるかに側方に寄って生えている。(第1脚脛節に関しては前述を見よ!)。第3・4脚脛節と蹠節は下面と両側に棘があるが、上面にはない。第3・4脚膝節は中央より少し前方に1本の棘がある。

腹部背面は地色淡褐色、特に側方は暗褐色かかる。明瞭に現われている心臓部の条は赤褐色。前縁に前方に向っている若干の非常に長い剛毛が生える。腹面は背面の側方のような側面である; 中央部は一様に淡褐色。胃外溝は暗褐色。淡褐色の下疣は暗褐色の上疣よりも短かく細い。

佐賀から♀1個体(Dönnitz)。

注: 本種は *Siberella Strand*, 1906 の属模式種である。このような重要な種が稀産種であるのは残念なことである。体の形態や第1脚の装飾毛はアオオビハエトリ [*Siberella vittata* (Karsch, 1879)] に似ているが、色彩や斑紋の傾向、特に心斑などは大きく異なる。また Taf. 14, Fig. 373B, C からは、*Embolus* の弯曲の状態や *Tibial apophysis* (アオオビハエトリとの類似をみると、*Bulb* 自体の形は大分ちがっている。なお原記載中の♀の記号(第1行, Taf. 14, Fig. 377:A♀ von den oben 3/1, と最終行, Ein ♀ aus Saga)は、図および本文の内容からみてそのあやまりであると思われる。したがって本種の♀の存在も明らかにする必要がある。

以上、*Euophrys aninotata*, *Icius pupus*, *Sitticus basalis*, *Telamonia cylindrata*, *Anarrhotus nishitakensis* および *Siberella barbata* の6種の原記載を示した。しかし日本産ハエトリグモの中でいわゆる稀産種といわれるものは40種以上を数える。この数は日本産ハエトリグモの約45%となっており、Prószyński (1971)にも示されるようにハエトリグモの分類の遅れを示す根拠の1つにもなると思う。今後のハエトリグモの分類の方向は、新分類群を増すことではなく、稀産種の正体の解明と400属4,000種の整理であると考える。この方向については Prószyński (1970)によっても提案されている。ハエトリグモの分類の正常化のためにも今後前述のような方向で努力したい。

文末ではあるが、ドイツ語文法等について種々ご教示を賜った富野勝・小菅善一両講師に厚く御礼申し上げる。

この稿における参考文献は次号に譲る。

埼玉県における採集記録 (II)

鳴田順一

さきに、新海栄一・原勝治の両氏によって秩父地方の真正クモ類 206種が報告された(Atypus, 1975(65)7~18)。両氏の報告以外にも県内にて、これまで採集されているクモについて簡単にまとめてみたので報告する。また将来、県全体のクモ相をまとめる上で少しでも参考になれば幸いである。なお、採集場所の後の()は筆者以外の採集者であり、文献から引用したものはその前に文献名を記した。日頃から同定などでお世話になっている新海栄一氏及び貴重な資料を提供していただいた熊田憲一・鈴木勝浩の両氏に感謝いたします。

- | | |
|--|-------------|
| 1. <i>Lathys puta</i> (O. P. Cambridge) | キイロカレハグモ |
| 松伏(鈴木勝浩氏) | |
| 2. <i>Uloborus tokyoensis</i> Kishida | トウキョウウズグモ |
| 秩父市黒谷(鈴木) | |
| 3. <i>Orchestina okitsui</i> Oi | オキツハネグモ |
| 天覧山 | |
| 4. <i>Pholcus phalangioides</i> (Fuesslin) | イエヌウレイグモ |
| 羽生市宝蔵寺沼付近 | |
| 5. <i>Argyrodes bonadea</i> (Karsch) | シロカネイソウロウグモ |
| 松伏(鈴木) | |
| 6. <i>Episinus caudifer</i> Doen. et Str. | ハラナガヒシガタグモ |
| 日高町巾着田 | |
| 7. <i>E. nubilus</i> Yaginuma | ムラクモヒシガタグモ |
| 天覧山 | |
| 8. <i>Steatoda cavernicola</i> (Boes. et Str.) | ハングツオスナキグモ |
| 天覧山 | |
| 9. <i>Stenomops nipponicus</i> Yaginuma | スネグロオチバヒメグモ |
| 笛目(熊田憲一氏) | |
| 10. <i>Theridion ferrugineum</i> Boes. et Str. | ヒザブトヒメグモ |
| 天覧山 | |
| 11. <i>T. octomaculatum</i> Boes. et Str. | ヤホシヒメグモ |
| 天覧山・巾着田など | |
| 12. <i>T. sudabides</i> Boes. et Str. | ヨツコブヒメグモ |
| 笛目(熊田) | |

1 3. <i>Nesticus mogera</i> Yaginuma	チビホラヒメグモ
飯能市大河原・飯能	
1 4. <i>Bathyphantes orientis</i> Oi	テナガグモ
Atypus, 1972 (59) 6~8 (南部敏明氏)	
1 5. <i>B. robustus</i> Oi	クロテナガグモ
秩父市橋立	
1 6. <i>Doenitzius peniculus</i> Oi	デニッサラグモ
笛目 (熊田)	
1 7. <i>Neolinypbia angulifera</i> (Schenkel)	ハンモックサラグモ
十文字峠付近	
1 8. <i>Meioneta nigra</i> Oi	クロケシグモ
正丸峠 (熊田)	
1 9. <i>Ostearius melanopygius</i> (O. P. Cambridge)	スソグロサラグモ
森林公園・羽生市	
2 0. <i>Solenysa mellotteei</i> Simon	アリマネグモ
森林公園	
2 1. <i>Erigonidium nigriteminarum</i> Oi	ハシグロナンキングモ
十文字峠付近	
2 2. <i>Gnathonarium dentatum</i> (Wider)	ニセアカムネグモ
巾着田・羽生市	
2 3. <i>Nematognathus sanguinolentus</i> (Walckenaer)	チビアカサラグモ
伊豆ヶ岳 (熊田)	
2 4. <i>Oedothorax angulituberis</i> Oi	コトガリアカムネグモ
巾着田・羽生市	
2 5. <i>O. tokyoensis</i> (Uyemura)	トウキョウアカムネグモ
松伏 (鈴木)	
2 6. <i>Araneus tartaricus</i> (Kroneberg)	コケオニグモ
Atypus, 1967 (43) 23~27 (遠藤啓一氏)	
2 7. <i>Zygella montana</i> (C. Koch)	ヤマキレアミグモ
十文字峠	
2 8. <i>Argiope amoena</i> L. Koch	コガネグモ
天覧山	
2 9. <i>Cyrtarachne bufo</i> (Boes. et Str.)	トリノフンダマシ
天覧山・飯能市大河原	
3 0. <i>C. nagasakiensis</i> Strand	シロオビトリノフンダマシ

赤沼試験場・天覧山

3 1. <i>C. nigra</i> Yaginuma	クロトリノフンダマシ
赤沼試験場・飯能市中山	
3 2. <i>Ogulnius pullus</i> Boes. et Str.	ヤマジグモ
名栗村河又・天覧山	
3 3. <i>Dyschiriognatha tenera</i> (Karsch)	ヒメアシナガグモ
Atypus, 1972 (59) 6~8 (南部)	
3 4. <i>D. quadrimaculata</i> Boes. et Str.	ヨツボシヒメアシナガグモ
巾着田	
3 5. <i>Pachygnatha clercki</i> Sundevall	アゴプトグモ
巾着田	
3 6. <i>Dolomedes raptor</i> Boes. et Str.	アオグロハシリグモ
大河原・毛呂山町	
3 7. <i>Alopecosa pulverulenta</i> (Clerck)	チリコモリグモ
秩父白石山(藤野英雄氏)	
3 8. <i>Lycosa depectinata</i> (Boes. et Str.)	カガリビコモリグモ
松伏(鈴木)	
3 9. <i>L. suzukii</i> Yaginuma	スズキコモリグモ
Acta Arach., 25(1) 16~22(1973) (大野正男氏)	
4 0. <i>Pirata japonicum</i> Tanaka	ヤマトコモリグモ
松伏(鈴木)	
4 1. <i>Rhynnarachne katoi</i> Chikuni	カトウツケオグモ
Atypus, 1968 (46~47) 34 (大野)	
4 2. <i>Tmarus rimosus</i> Paik	セマルトラフカニグモ
天覧山・中山など	
これまで、県内のリスト中にトラフカニグモと同定されているもの多くはこのセマルトラフカニグモと思われる。筆者自身はトラフカニグモを名栗村河又で採集したのみである。	
4 3. <i>Xysticus atrimaculatus</i> Boes. et Str.	クロボシカニグモ
巾着田	
4 4. <i>X. trizonatus</i> Annen	オビボソカニグモ
森林公園(川端純夫氏)	
4 5. <i>Bianor pullus</i> Boes. et Str.	キレワハエトリ
松伏(鈴木)	
4 6. <i>Jotus difficilis</i> Boes. et Str.	マガネアサヒハエトリ
赤沼試験場	

4 7. <i>Marpissa elongata</i> (Karsch)	ヤハズハエトリ
巾着田・宮沢湖	
4 8. <i>M. magister</i> (Karsch)	オスクロハエトリ
巾着田	
4 9. <i>Chiracanthium unicum</i> Boes. et Str.	ヤサコマチグモ
飯能市上畑	
5 0. <i>Clubiona kurilensis</i> Boes. et Str.	ヒメフクログモ
巾着田・羽生市	
5 1. <i>Phrurolithus claripes</i> (Doen. et Str.)	イナヅマウラシマグモ
Kishidaia, 1972 (29~30) 10 (権田重雄氏)	
5 2. <i>Orthobura crucifera</i> Boes. et Str.	オトヒメグモ
飯能市矢嵐・天覧山	
5 3. <i>Trachelas japonicus</i> Boes. et Str.	ネコグモ
天覧山	
5 4. <i>Herpyllus striatus</i> (Kishida)	トラフグモ
天覧山	

以上 54 種を秩父地方の真正クモ類に追加する形で記録した。ここに記録した以外にも種まで同定されていない筆者自身の標本や、東京蜘蛛談話会諸氏の採集品を含めると現在 280 種程度が知られている。しかしながら、県別リストの場合 350 種前後が必要なことと、採集地域が限られていることなどから今後、広範に調査活動をおこなわねばならない。

文中に示した文献以外に次の文献をひろく引用した。

Oi, R., (1960) Linyphiid spider of Japan. J. Inst. Polytech.. Osaka City Univ., (D), 2: 137-244, pls. 1-26

八木沼健夫、(1968) 原色日本蜘蛛類大図鑑、保育社

——— (1970) 日本の真正蜘蛛類相 国立科博研報 13(4): 639-701

——— (1973) 日本の真正蜘蛛類相(Ⅲ) 追大文紀、(7)、69-74

——— (1974) 日本の真正蜘蛛類相(Ⅳ) 同上、(8)、169-173

——— (1975) 日本の真正蜘蛛類相(Ⅴ) 同上 187-195

大野正男、(1975) 埼玉のクモ類研究史(Ⅰ)、Kishidaia (39) 15-21

八木沼健夫・新海栄一、(1976) 分布資料、Atypus (66), 47-48

岩手県好摩のクモ

— あっちこっちのクモの一環として —

熊田憲一

岩手県のクモについては先に片岡佐太郎氏が「岩手県産真正蜘蛛類（Ⅰ）」として発表しており、またいくつかの報文も見ることが出来ます。今回私は好摩（石川啄木で有名な渋民村の北にある）を訪れる機会を得、好摩駅近くにある駒形神社周辺で採集を行なったので、何かの参考になればと思いここに報告します。

採集年月日 1976年9月20日 天候 雨 採集時間 AM 6:30 ~ 8:30

駒形神社は好摩駅東方2kmほどの北上川を渡った対岸の丘陵にあり、またその参道入口は姫神山への登山口でもある。参道の西側は畠、東側は雑木材、後方は植林と雑木林でその先は畠となる。神社の社は小さいが境内は広く大きな杉の木も多く見られ、また駒形というだけあり絵馬も見うけられた。神社西側より岩手山が遠く望まれた。当日は雨であったため活動範囲はかなりせばめられてしまい、採集は主として神社の社と杉の木の周辺で行なった。

以下はそのリストとその時気がついたことのメモです。

1. *Amaurobius flavidorsalis* Yaginuma セスジガケシグモ

神社の境内にある杉に見られ、そのほかでは神社等の建物や石垣にも見られなかった。成体から小さな幼体（+3位）の巣まで見られた。アリなどを網にかけるとすぐに出てくるので、観察や採集は以外と楽である。

2. *Miagrammopes orientalis* Boes. et Str. マネキグモ

3. *Pholcus opilionoides* (Schrank) タイリクユウレイグモ

神社の建物にごく普通に見られ、そのほとんどが成体になっていたが、雄の成体は見つけることは出来なかった。かつて山梨県吉田や長野県田沢で見たものより少しばかり大きい個体だった。

4. *Theridion angulithorax* Boes. et Str. ツリガネヒメグモ ??

普通のツリガネヒメグモと同様な網を張り、同様な色彩をしているが大形で、これは先の40号「富士山の蜘蛛」P. 8リストナンバー19, *Tneridion* sp. ツリガネヒメグモの近似種の可能性もある。

5. *T. latifolium* Yaginuma ヒロハヒメグモ

6. *Achaearanea lunata* (Clerck) カグヤヒメグモ

7. *A. tepidariorum* (C. Koch) オオヒメグモ

8. *Neolinypbia japonica* Oi ツリサラグモ

9. *Prolinyphia limbatinella* (Boes. et Str.) フタスジサラグモ

10. *Acusilas coccineus* Simon ハシリグモ

(+3)位の幼体が、小さな枯葉を巻いた住居を円網につるしていた。

- 1 1. *Araneus fuscocoloratus* Boes. et Str. ヤミイロオニグモ
1 2. *Neoscona nautica* (L. Koch) イエオニグモ
　　駿周辺や人家に多く個体も大きい。また、同様にして人家に大きな円網を張るクモがあり、オニグモと思われたが個体確認は出来なかった。
1 3. *Zilla sachalinensis* (Saito) カラフトオニグモ
1 4. *Meta segmentata* (Clerck) キタドヨウグモ
　　北上川川辺の雑草地帯に円網を張っていた。メガネドヨウグモとよく似ている。
1 5. *Uroctea compactilis* L. Koch ヒラタグモ
1 6. *Agelenopsis opulenta* L. Koch コクサグモ
　　全てが成体になっており、雌の網の近くに雄が来ているものも見られた。同属であるクサグモは見つける事が出来なかった。
1 7. *Pisaura lama* Boes. et Str. アズマキシダグモ
1 8. *Pardosa laura* Karsch ハリゲコモリグモ
　　卵のうを持った個体から(+3)位の幼体まで見ることが出来た。
1 9. *Misumenops tricuspidatus* (Fabricius) ハナグモ
2 0. *Laufelia aenea* Simon エキスハエトリ
　　杉の樹皮上及び木に近い地上を徘徊している。
2 1. *Clubiona jucunda* (Karsch) ヤハズフクログモ
2 2. *C. vigil* Karsch ムナアカフクログモ

あっちこっちのくも　追加

I-2 山形県山寺

追加種採集日：1976年5月12日

- 5 1. *Chrysso punctifera* Yaginuma ホシミドリヒメグモ
5 2. *Argyrodes saganus* (Doen. et Str.) ヤリグモ
5 3. *Araneus macacus* Uyemura ヤエンオニグモ
5 4. *Neoscona scylla* (Karsch) ヤマシロオニグモ
5 5. *Zilla astridae* (Strand) サガオニグモ
5 6. *Coelotes kitazawai* Yaginuma アズマヤチグモ
5 7. *Pardosa T-insignita* (Boes. et Str.) ウヅキコモリグモ
5 8. *Tmarus piger* (Walckenaer) トラフカニグモ

DRAGLINE 41 *

オオヒメグモを襲ったミスジハエトリ雌

鈴木 勝浩

本誌No.40に「クモを襲ったハエトリグモ3種」が書かれている。

私は今年の9月17日午前7時15分頃、野外において、卵のう保護中のオオヒメグモをミスジハエトリが襲ったのを目撃した。木の葉を住居にしているオオヒメグモに、20cmあまりの高さから飛びつくように襲った。木の葉の中には親グモと共に卵のうもあったのだが、親グモが捕食されただけであった。無事であった卵のうは5日後ハッチした。

ヤホシヒメグモの産卵からハッチまで

鈴木 勝浩

7月に5個体ヤホシヒメグモの産卵からハッチまでの日数を調べたところ、わずか5日間であった。1回の産卵数は約60個である。子グモがハッチするまで親グモは、右わき腹と第4脚を使いかかえるようにして保護していた。

沖永良部島のクモの俗称

小野 展嗣

4年前、一週間程奄美の沖永良部島へ採集旅行したことがある。その時泊めてもらった家のおばさんに、このへんではクモのことを何と呼んでいるのかたずねてみたところ、「ひぶがし」と呼んでいると教えてくれた。どうして「ひぶがし」なのかは知らないが、とにかくそう呼んでいるのだそうだ。どんなクモをさすのかもきいてみると、手のひら程もある奴で2mもの大きな網を張るという。手のひらは大きさだがオオジョロウグモのことであろう。「ひぶがし」というのは初めてきいたので興味をもったが、深く調べもせずそのままになってしまった。一応沖永良部にそういう名があることを報告しておく。クモならすべて「ひぶがし」なのか、或はオオジョロウだけなのか、向うへ行かれる方があったら確認してみて下さい。

コケオニグモに咬まれて（昭和51年6月12日の観察ノートより）

山川 守

昭和51年6月9日神奈川県丹沢山塊飯山観音にて採集したコケオニグモ♀にエサ（ハエ）をやろうとして、右親ゆびのつけ根を咬まれる。咬まれている時はヤマオニグモやオニグモと同じ痛さ（以前、同じ場所をヤマオニグモとオニグモに咬まれたことがある）であった。しかし、ヤマオニグモやオニグモはしばらくすると、脈と同じ調子でズキン、ズキンと痛みが約10分位づくが（その後も多少の痛みが約1時間残る）、コケオニグモの場合、しば

らくすると手がしびれるような感じになり、同時にキメ口付近がムズがゆくなってきた。このムズがゆさは約1時間つづいた。また、咬まれた付近を中心として、親ゆびのつけ根全体が、まわりの皮膚よりも赤みがかかり、少しばれあがった。また、肉も左の親ゆびの同じ部分と比較して、いくぶん硬くなっていた。今後も、いろいろなクモに咬まれて体験記録をつづってみたいが、ワクドツキシグモとツシマトリノフンダマシに咬まれるのが（おそらく咬むほどの力は無いと思うが）夢である。

東北ヘジョロウグモを求めて

栗原輝代子

ジョロウグモの北限は青森県下北半島とされています。私は東北地方のジョロウグモ雌成体を求めて、1976年10月7日～10日弘前・秋田へ行きました。その際、ジョログモ探しに四苦八苦しました。そこで、今回は“この時期にこの地方には、このクモはこんな状態であった”という情報を提供したいと思います。東京付近では、ジョロウグモの産卵シーズンは10月下旬～11月上旬ですが、一般に東北はそれよりも2週間程早くシーズンに入るようです。10月7～8日、弘前大学付近のニセアカシヤの林や、弘前城のサクラ並木・雑木林などをくまなく（？）捜しましたが、どうした訳か例の大きい網や派手な腹部をもつた雌の一匹さえも見つけ出すことができませんでした。ただ1cm位の小さな雄が2匹やつとみつかっただけでした。ある事から秋田へ向うことになり、やっとのことでニセアカシヤの林やマツ林・雑木林などで40～50匹程度観察する事が出来ました。弘前と秋田では、気候的に大きな差があるのか今後の検討を要しますが、10月7日～10日にはジョロウグモ雌成体は弘前には居なくて、秋田では見ることができました。ちなみに弘前ではコクサグモが産卵シーズンに入る頃でしたが、秋田ではまだ産卵時期には早いようでした。（東京付近では10月下旬～11月中旬）

弘前のリンゴの木には赤い実がたわわに成り、また秋田周辺ではイネの刈入れが半分ほど進んで秋たけなわでした。私達の住んでいるまわりのクモの季節的变化と他の地方でのそれとかなり違うことに、今さらながら驚嘆している次第です。

— DRAGLINE の記事を募集しています。 —

あなたの気がついた事、何んでもかまいません。記事をお寄せ下さい。このコーナーに限って原稿用紙でなくてもかまいません。（葉書1枚にザッと書いて5～10行ほどになります。）

クモ標本同定会におもう

鈴木勝浩

私は中学の頃から談話会に入会はしていたのですが、同定会に出席したのははじめてでした。以下、出席の感想を述べさせていただきます。

はじめて出席する私にとっては、多少の不安と期待とがありました。しかし、不安というものはいつのまにか胸中から消え、時間の経過も忘れるほどの楽しい、リラックスしたムードの中での会でした。会員の方々とは、はじめてお会いしたのですが、自分も不思議なくらい気楽に話をすることができました。おかげで、多くの方と親しくなることができました。私はこの会に、200本近い標本をもっていったのですが、多くの会員の方々のおかげで、ほとんどのクモに名前をつけていただきました。ほんとうにありがとうございました。

私はこの同定会において、クモの同定の方法・生態・形態など多くのことを学ぶことができました。クモの同定の難しさ、同定して下さる人の苦労の大きさというものを感じました。この会を通して、多くのクモを研究・愛好する人たちと話をすることができ、たいへん勉強になり、よい刺激になりました。

まだクモと友人になったばかりの私にとっては、クモについて知るべきことがたくさんあります。クモの知識を増やす方法は、単に文献・図鑑類とからではなく、このような同定会を通じても、より多くのクモについて吸収できるということを知ることができました。

東京蜘蛛談話会観察会報告 1976年一春一

日向薬師 広沢寺のクモ

高橋 登

1976年5月16日 東京蜘蛛談話会の観察採集会が神奈川県下、日向薬師・広沢寺において行なわれました。その時に観察採集したクモのリストを報告致します。

当日の参加者： 相本幸一、梅林 力、加藤笑子、熊田憲一、権田重雄、新海栄一、貞元己良

KISHIDAI A 1977, May

(敬称略) 関下俊英、高橋 登、蓮沼克己、松浦裕司、吉谷昭憲、松本誠治 以上13名

目 錄

ANTRODIAETIDAE

1. *Antrodiaetus roretzi* (L. Koch) カネコトタテグモ

CTENIZIDAE

2. *Ummidia fragaria* Doenitz キノボリトタテグモ

ATYPIDAE

3. *Atypus karschi* Doenitz ジグモ

ULOBORIIDAE

4. *Uloborus varians* Boes. et Str. ウズグモ

SEGESTRIIDAE

5. *Ariadna lateralis* (Karsch) ミヤグモ

6. *Segestria komatsuana* Komatsu コマツエンマグモ

OONOPIDAE

7. *Ischnothyreus narutomii* (Nakatsudi) ナルトミダニグモ

PHOLCIDAE

8. *Pholcus crypticolens* Boes. et Str. ユウレイグモ

THERIDIIDAE

9. *Anelosimus crassipes* (Boes. et Str.) アシプトヒメグモ

10. *Chrysso punctifera* (Yaginuma) ホシミドリヒメグモ

11. *Enoplognatha japonica* Boes. et Str. ヤマトコノハグモ

12. *Episinus nubilus* Yaginuma ムラクモヒシガタグモ

13. *Argyrodes saganus* (Doen. et Str.) ヤリグモ

14. *Theridion chikunii* Yaginuma バラギヒメグモ

15. *Achaearanea tepidariorum* C. Koch オオヒメグモ

16. *T. takayense* Salto タカユヒメグモ

NESTICIDAE

17. *Nesticus brevipes* Yaginuma コホラヒメグモ

LINYPHIIDAE

18. *Linyphia herbosa* Oi シバサラグモ

19. *Neolinyphia fusca* Oi クスミサラグモ

20. *N. japonica* Oi シリサラグモ

21. *Prolinyphia yunohamensis* (Boes. et Str.) ユノハマサラグモ

MICRYPHANTIDAE

2 2. *Asperthorax communis* Oi

ザラアカムネグモ

MIMETIDAE

2 3. *Ero japonica* Boes. et Str.

センショウグモ

SYMPHYTOGNATHIDAE

2 4. *Conoculus lyugadinus* Komatsu

ヨリメグモ

2 5. *Mysmena jobi* Kraus

ナンブコツブグモ

ARANEIDAE

2 6. *Acusilas coccineus* Simon

ハツリグモ

2 7. *Araneus uyemurai* Yaginuma

ヤマオニグモ

2 8. *A. macacus* Uyemura

ヤエンオニグモ

2 9. *Neoscona scylla* (Karsch)

ヤマシロオニグモ

3 0. *Hypsosinga sanguinea* (C. Koch)

シロスジショウジョウグモ

3 1. *Zilla sachalinensis* (Saito)

カラフトオニグモ

3 2. *Argiope minuta* Karsch

コガタコガネグモ

3 3. *Cyclosa octotuberculata* Karsch

ゴミグモ

3 4. *C. sedeculata* Karsch

ヨツデゴミグモ

3 5. *Meta reticuloides* Yaginuma

ヤマジドヨウグモ

3 6. *M. yunohamensis* Boes. et Str.

メガネドヨウグモ

UROCTEIDAE

3 7. *Uroctea compactilis* L. Koch

ヒラタグモ

ZODARIIDAE

3 8. *Doosia japonica* (Boes. et Str.)

ドウシグモ

AGELENIDAE

3 9. *Ageleena limbata* Thorell

クサグモ

4 0. *A. opulenta* L. Koch

コクサグモ

PISAURIDAE

4 1. *Dolomedes sulfureus* L. Koch

イオウイロハシリグモ

4 2. *D. pallitarsis* Doen. et Str.

スジブトハシリグモ

4 3. *D. raptor* Boes. et Str.

アオグロハシリグモ

4 4. *D. saganus* Boes. et Str.

スジアカハシリグモ

LYCOSIDAE

4 5. *Pardosa laura* Karsch

ハリゲコモリグモ

THOMISIDAE

4 6. *Misumenops japonicus* (Boes. et Str.)

コハナグモ

4 7. <i>M. tricuspidatus</i> (Fabricius)	ハナグモ
4 8. <i>Oxytate striatipes</i> L. Koch	ワカバグモ
4 9. <i>Tmarus piger</i> (Walckenaer)	トラフカニグモ

SALTICIDAE

5 0. <i>Boethus sexdentatus</i> Yaginuma	ムツバハエトリ
5 1. <i>Carrhotus xanthogramma</i> (Latreille)	ネコハエトリ
5 2. <i>Evarcha albaria</i> (L. Koch)	マミジロハエトリ
5 3. <i>Hasarius doenitzi</i> Karsch	デニッソハエトリ
5 4. <i>Marpissa pullus</i> (Karsch)	ヨダンハエトリ

CLUBIONIDAE

5 5. <i>Clubiona lena</i> Boes. et Str.	トビイロフクログモ
5 6. <i>C. virgil</i> Karsch	ムナアカフクログモ

ANYPHAEINIDAE

5 7. <i>Anyphaena pugil</i> Karsch	イズツグモ
------------------------------------	-------

八柱靈園のクモ

権田重雄

1976年10月10日、東京蜘蛛談話会の第13回観察会が千葉県松戸市八柱靈園において行なわれましたので、その時に観察、採集したクモのリストを報告致します。

当日の参加者： 石山鉄幸、梅林力、笠原須磨生、小澤實樹、熊田憲一、権田重雄、貞元己良、
(敬称略) 佐藤幸子、鳴田順一、下村和秀、新海栄一、高野伸二、高橋登、高橋米夫、
田中理恵、並木敏一、古浜隆、松本誠治、吉川伊智郎

目録

Ctenizidae

1. *Latouchia japonica* Strand キシノウエトタテグモ

地上から 1.5 m ほどの木の幹のうろ状の所に、住居を作っていた。

Atypidae

2. *Atypus karschi* Doenitz ジグモ

Uloboridae

3. *Miagrammopes orientalis* Boes. et Str.

マネキグモ

Segestriidae

4. *Ariadna lateralis* (Karsch) ミヤグモ

Theridiidae

5. *Artamnes cylindrogaster* Simon オナガグモ

6. *Dipoena punctisparsa* Yaginuma シモフリミジングモ

7. *Enoplognatha transversifoveata*

(Boes. et Str.) カレハヒメグモ

8. *Argyrodes saganus* (Doen. et Str.) ヤリグモ

9. *Theridion angulithorax* Boes. et Str. ツリガネヒメグモ

10. *T. chikunii* Yaginuma バラギヒメグモ

11. *T. japonicum* Boes. et Str. ヒメグモ

12. *Achaearanea lunata* (Clerck) カグヤヒメグモ

13. *Theridion sterninotatum* Boes. et Str. ムナボシヒメグモ

14. *Achaearanea tepidariorum* (C. Koch) オオヒメグモ

Microphyntidae

15.	<i>Cornicularia vulgaris</i> Oi	コテングヌカグモ
16.	<i>Gen. sp.</i>	コサラグモ科一種
MIMETIDAE		
17.	<i>Ero japonica</i> Boes. et Str.	センショウグモ
ARANEIDAE		
18.	<i>Araneus lugubris</i> (Walc.)	コゲチャオニグモ
19.	<i>A. macacus</i> Uyemura	ヤエンオニグモ
20.	<i>A. ventricosus</i> (L. Koch)	オニグモ
21.	<i>A. mitificus</i> (Simon)	ビジョオニグモ
22.	<i>A. pentagrammicus</i> (Karsch)	アオオニグモ
23.	<i>A. semilunaris</i> (Karsch)	マルズメオニグモ
24.	<i>Neoscona doenitzi</i> (Boes. et Str.)	ドヨウオニグモ
25.	<i>Argiope minuta</i> Karsch	コガタコガネグモ
26.	<i>Cyclosa argenteoalba</i> Boes. et Str.	ギンメッキゴミグモ
27.	<i>Cyrtarachne bufo</i> (Boes. et Str.)	トリノフンダマシ
28.	<i>Meta yunohamensis</i> Boes. et Str.	メガネドヨウグモ
29.	<i>Nephila clavata</i> L. Koch	ジロウグモ
30.	<i>Poltys illepidus</i> C. Koch	ゲホウグモ
TETRAGNATHIDAE		
31.	<i>Leucauge subblanda</i> Boes. et Str.	コシロカネグモ
32.	<i>Tetragnatha praedonia</i> L. Koch	アシナガグモ
UROCTEIDAE		
33.	<i>Uroctea compactilis</i> L. Koch	ヒラタグモ
AGELENIIDAE		
34.	<i>Agelenopsis opulenta</i> L. Koch	コクサグモ
35.	<i>Coelotes luctuosus</i> L. Koch	メガネヤチグモ
PISauridae		
36.	<i>Dolomedes sulfureus</i> L. Koch	イオウイロハシリグモ
LYCOSIDAE		
37.	<i>Lycosa coelestis</i> L. Koch	ハラクロコモリグモ
38.	<i>Pardosa laura</i> Karsch	ハリゲコモリグモ
39.	<i>P. T-insignita</i> (Boes. et Str.)	ウヅキコモリグモ
OXYOPIDAE		
40.	<i>Oxyopes badius</i> Yaginuma	クリチャササグモ
41.	<i>O. sertatus</i> L. Koch	ササグモ

THOMISIDAE

4 2. <i>Coriarachne fulvipes</i> (Karsch)	コカニグモ
4 3. <i>Misumenops tricuspidatus</i> (Fabricius)	ハナグモ
4 4. <i>Oxyptila decorata</i> Karsch	キハダカニグモ
4 5. <i>Oxytate striatipes</i> L. Koch	ワカバグモ
4 6. <i>Philodromus spinitarsis</i> Simon	キハダエビグモ
4 7. <i>P. subaureolus</i> Boes. et Str.	アサヒエビグモ
4 8. <i>Pistius truncatus</i> (Pallas)	ガザミグモ
4 9. <i>Thomisus labefactus</i> Karsch	アズチグモ
5 0. <i>Tmarus rimosus</i> Paik	セマルトラフカニグモ
5 1. <i>Xysticus croceus</i> Fox	ヤミイロカニグモ

SALTICIDAE

5 2. <i>Aelurillus festivus</i> L. Koch	ヤマジハエトリ
5 3. <i>Carrhotus xanthogramma</i> (Latreille)	ネコハエトリ
5 4. <i>Evarcha albaria</i> (L. Koch)	マミジロハエトリ
5 5. <i>Hasarius doenitzi</i> Karsch	デニッシュハエトリ
5 6. <i>Marpissa roemerri</i> Strand	オオハエトリ

CLUBIONIDAE

5 7. <i>Chiracanthium eutitttha</i> Boes. et Str.	アシナガコマチグモ
5 8. <i>C. lascivum</i> Karsch	ヤマトコマチグモ
5 9. <i>Trachelas japonicus</i> Boes. et Str.	ネコグモ

HETEROPODIDAE

6 0. <i>Heteropoda forcipata</i> (Karsch)	コアシダカグモ
---	---------

CTENIIDAE

6 1. <i>Anahita fauna</i> Karsch	シボグモ
----------------------------------	------

まとめ

恒例の秋の観察会は好天に恵まれ、また初めての参加者が多く盛大に行なわれた。当日、園内は日が良かったためかことのほか墓参者が多く、その上ヤブカの大軍に悩まされ、いつもと勝手の違う一日の様であった。

採集されたのは 61 種であった。平地としては順当なところと考えられる。今回、数 m から 1 cm ほどのゲホウグモが 5 頭採集されたが、居場所が葉の落ちた枝先やマツの小枝等、あまり注意を引かないところなので、今後こういったところを気を付ければ、さらに採集例がふえると思われる。

8月末の下見では除草剤が散布された直後らしく下草が枯れていた。そのためか今回樹上・草間に住むクモに對して地表徘徊性のクモの種類数、特に個体数が少なかったのが興味深く感じられた。

10大ニュース

(運営委員会選定)

その 1

日本産 *Tmarus* 属 2種に

これまで、八木沼先生の図鑑に *T. piger* (Walckenaer) トラフカニグモが出ていたが、*Epyginum* や *Palp* が載っていないかったため、この属のクモは全てトラフカニグモと同定されてきた。しかし、韓国における白甲鋪氏の研究に基づき、昨年の秋にドイツへ留学された小野展嗣氏が我国の *Tmarus* 属を詳細に検討した結果、トラフカニグモと同定されている中(*T. rimosus* Paik セマルトラフカニグモが混入していることが判明した。

その 2

イヨグモの学名は原記載通り

八木沼先生の著された原色日本蜘蛛類大図鑑 p. 117、p. 153、fig. 319 に、イヨグモ科イヨグモ(学名未定)というクモが載っている。その後先生が著された日本の真正蜘蛛類相(1970)には、イヨグモ科イヨグモの学名は、*Prodidomus* (?) [nom. nud.] *imaidzumi* Kishida, 1914 と記されている。いずれにしても問題の多いクモであったのだろうが、Acta Arachnologica, 27(1):37-42 (1976) に、Norman I. Platnick が、On Asian *Prodidomus* (ARANEAE, Gnaphosidae) と題して、上記イヨグモの再記載と、他2新種の記載をしている。氏の用いた学名は、*Prodidomus imaidzumi* Kishida, 1914 で、和歌山県産(湊氏採集)と宮崎県産(萱島先生採集)の♀によって検討されたものである。他の2新種も♀による記載で、♂は不明である。

♂の発見と、イヨグモ科とワシグモ科との関係などが残っているが、長年問題になっていたイヨグモの学名がはっきりしたことは、それも原記載の学名が有効であったことなどは喜ばしいことである。

その 3

ムナアカフクログモとその類似種

今までムナアカフクログモ *Clubiona vigil* karsch と同定していたクモの中に、斑紋のよく似たヤマトフクログモ(旧称フクログモ) *C. japonica* L. Koch が含まれていた事が八木沼建夫先生により明らかにされた。この2種は一時同種の雌雄(ムナアカは雌・ヤマトは雄のみで記載された)と思われていたほど外観はよく似ている。しかし、細部はもとより外雌器・外雄器が違い、その点で見れば直ちに区別がつく(ATYPUS NO. 67:35-37 図1-8)。今まで概念的同定で2種共にムナアカやヤマトとしたものや混棲している地域もあり、過去の記録は100%信頼出来ないようである。会員諸氏も手持ちの標本をもう一度検討して下さい。不明な点がありましたら標本同定会等に御持参いただければ正確に種の決定をします。

その 4

コケオニグモ 丹沢に現われる

小雨の降る丹沢は低い雲におおわれて山水画の様である。以前採集会を行なった事のある飯山に出陣した丹沢の二人は、雨のとどく事のない原生林の中を歩いていた。なかなかの成果に気を良くしている二人。道は下り坂。道をふさぐ様に立つ大木をKがカサでたたきながら「こんな木には何かいるんだけど。」と、そのとたん一步後のYが「アッ。」との声と共に動かなくなつた。急ぎKが目を上げるとカサでたたいた20cmほど上の樹皮のはがれた所に緑色の大きなクモが！してやられたり、丹沢の二人おなじみの「肩越しの珍珠採り」といわれるY独特の採集法にKはまたまた涙を飲んだのであった。6月9日の出来事でした。

その 5 カトウツケオグモ 2年連続の出現

昨年の10大ニュースを飾ったカトウツケオグモが1976年6月20日、大阪府の箕面公園にて関西の強打者西川喜朗氏の手によって記録された。対島・関西と2年続きで、次は絶対関東だと怪気炎を上げる者もあり、夏のおとずれを手ぐすね引いているもののその結果やいかに。

その 6 オダカグモ 静岡県伊豆半島で採れる

東京蜘蛛談話会恒例の夏期合宿は、今年も8月2日～4日伊豆半島石廊崎で行なわれた。夜はトランプに明け暮れるという意外な強化合宿であったが、日中の熱心な活動（？）と行き帰りの道中の観察は、夜のギャップを吹き飛ばすような成果があった。中でも、天城峠付近では萱嶋先生がオダカグモを採集された。これでオダカグモは静岡県にも居ることが明らかになった。また、K嬢はアカイロトリノフンダマシの黒色型を発見して一人で喜んでいた。

その 7 学研の図鑑『クモ』出版される

子供向けの学習図鑑で昆虫・蝶・動物などは数多く出ている。その中のクモというと、だいたいが昆虫の後に、昆虫のなかま・虫でないむしと言う様にして、こんな生き物もいるのですよ、という紹介程度に載っており、クモ仲間としては誠に肩身の狭いものであった。しかし本年、学習研究社よりクモだけの図鑑が出版された。図より写真をと今までのクモの本としては趣向の違うものである。関係者のほとんどが我談話会のメンバーであることも見落せない。対称は小・中学生と言うものの、内容は一般の人が見ても決して見おとりのするものではなく、逆に新見知・新知識も多く、大いに参考になると思われます。著者自信の作、というところです。

その 8 東亞蜘蛛学会40周年記念大会開かれる

東亞蜘蛛学会の第8回大会（創立40周年記念大会）が、大阪のなにわ会館で開催されました。参加者は記念大会にふさわしく沖縄から北海道まで日本全国90名（談話会員31名）におよび、第1回大会をしのぐ最高の人数になり、講演も高知の川原氏の特別講演をはじめとして20を数えました。講演はコモリグモの生態に関するものが多く、近いうちにコモリグモ分科会ができるほどでした。質疑応答も極めて活発で、特に我談話会の虎氏は溝演発表に、質問に、さらに懇親会で始めて歌をう

たうという活躍ぶりで、仕掛人の元締の役目をはたして下さいました。虎氏が太田裕美をうたえば、日本野鳥の会前東京支部長が天理真理で応戦、竜氏は時代劇主題歌で対抗する中美声のほまれも高い談話会自称美女連もくり出し、さながら素人のど自慢の様であった。さすがにお膝元の関西である。講演に、懇親会にと中身の濃く楽しい学会であった。

その 9

小野展嗣氏 ドイツへ留学

大学卒業後すぐに、結婚されてアッといわせた小野展嗣氏が、奥様と一緒にドイツ・マインツ大学へ動物学を修めに留学されました。この留学の動機の1つに、ドイツにある日本のクモの標本の検討というのがあることは心強い限りです。若くして、海外へ進出した談話会員は国見裕久氏もいますが、奥様と一緒に、学生としてというのは彼がはじめてです。口の悪い友達は、この1年間の彼の行動（結婚に留学）は親立せの〇。〇に〇〇〇だといっていますが、ご両親方のお二人への信頼と期待に沿うよう頑張ってもらいたいと思います。

その 10

ゲホウグモ 八柱靈園で5頭

10月10日、八柱靈園における東京蜘蛛談話会観察会で、ゲホウグモが5頭採集された。あたりの気配でクモの種類が判るという大御所新海氏が3頭、毎回安打の高野氏が1頭、もっか売り出し中の熊田氏が1頭であった。強打者小野氏がドイツに留学中のため、クリンナップトリオはこの3氏となりました。なお、役不足のためかどうかわかりませんが、熊田氏が採集したゲホウグモは極めて小さく、高倍率のルーペでかろうじて判別できたとのことです。ゲホウグモも採集例が増え、今回をもちまして普通種の仲間入りとなりそうです。

番外 その 11

三会合同例会 40人を越える

クリスマスのハデな興奮がきれいさっぱりおさまった26日、毎度おなじみ渋谷の『大橋』で三会合同例会が開かれた。いつもははじめて通っている私めは、この日に限って47分の遅刻。“しめしめ自己紹介は終る頃だろう”と気楽に会場に飛び込む。ところが室の中は人・人・人で自己紹介の真最中。これはとんでもない所へ来てしまった。蜘蛛の子1尾入れそうにない。それでも一見平然と（内心かなりあせって）席を捲し、やっと確保した席にボソッと坐る。落ちついてみると暮の忙しい時期であるのに錆々たるメンバーが出席されていたことに気づく。大阪からかけてくださった先生、地元のダニ・多足・蜘蛛の先生、会場の前と後を占領しているのは談話会おめつけ役S氏・M氏、（この日めずらしくS氏は美女4名にかこまれ昼食をとっている。）若さ溢れる学生さん、談話会の美女K・S・M・Kさん、……。参加者は昨年の29名を遥かに越え総勢ざっと40数人。会の話題も学名を扱ったものから生態的なものまで幅広く、40数人の熱気は会の終了する午後5時まで続いた。この熱気がさらに次回まで続くことを願って報告を終る。私こと忙しい暇人

予告

ミズクモの採集なるか

北海道からミズクモが採集されたのが今から40年ほど前で、厚岸の湿原にある池からです。その後何人かの者が調査に出向いたものの全く見つからず、すでに全滅したのではないかと言われています。またこのミズクモに関しては〇年〇月〇日に誰が採ったのか、という正確なことさえ分っていません。しかしこれが日本でも数少ない記録の一つでもあり、その重要性から考えてももう一度集中的な調査を考えられました。今回その構想がまとまり、1977年7月に出発する事になった。過激派集団水曜会・ホームランバッターの前野鳥の会東京支部長以外は正常なる会員諸氏合計10余名である。マメイタイセキグモ・ゲホウグモ・ムツトゲイセキグモ・キジロオヒキグモ・ソメワケトリノフンダマシ・カトウツケオグモなど珍殊採りの名人ぞろいである談話会夏のクリーンナップトリオが久びさに顔をそろえての出陣である。また中にはミズクモを手にし、久し振りに一旗上げようという者もあり、ミズクモが恐れをなして水中深く潜ろうともその気配でつかまることはうけあいである。その結果は……。ただ、この調査は宿の関係もあって会員全員に声をかけることが出来なかつたことが残念。とは主催者の弁である。

KISHIDAIAのバックナンバーあります（一部コピー）

N O.	1.	2 0 0 -	N O.	1 2 .	1 7 5 -	N O S.	2 6 ~ 2 8 .	4 0 0 -
N O.	2.	2 0 0 -	N O.	1 3 .	1 5 0 -	N O S.	2 9 ~ 3 2 .	8 5 0 -
N O.	3.	2 0 0 -	N O.	1 4 .	1 5 0 -	N O.	3 3 .	1 5 0 -
N O.	4.	1 0 0 -	N O.	1 5 .	2 0 0 -	N O.	3 4 .	2 0 0 -
N O.	5.	1 2 5 -	N O S.	1 6 ~ 1 7 .	2 5 0 -	N O.	3 5 .	2 0 0 -
N O.	6.	1 5 0 -	N O.	1 8 .	1 5 0 -	N O.	3 6 .	2 0 0 -
N O.	7.	2 2 5 -	N O.	1 9 .	1 7 5 -	N O.	3 7 .	1 5 0 -
N O.	8.	1 5 0 -	N O S.	2 0 ~ 2 1 .	2 0 0 -	N O.	3 8 .	3 5 0 -
N O.	9.	1 7 5 -	N O.	2 2 .	2 0 0 -	N O.	3 9 .	9 5 0 -
N O.	1 0 .	2 0 0 -	N O S.	2 3 ~ 2 4 .	2 5 0 -	N O.	4 0 .	9 0 0 -
N O.	1 1 .	1 0 0 -	N O.	2 5 .	1 5 0 -	N O.	4 1 .	9 0 0 -

(申し込みは事務局まで)

東京蜘蛛談話会活動報告

1976年1月より1977年4月までに東京蜘蛛談話会が行なった活動を、報告いたします。

1976年

- 1 月 14 日 談話会通信 N O. 9 (1・2 月号) 発行
2 月 29 日 第 1 回標本同定会・懇談会 (大橋区民会館ー以下大橋と省す) 15 名参加
5 月 10 日 談話会通信 N O. 10 (5 月号) 発行
16 日 春の観察・採集会 (日向薬師から広沢寺) 13 名参加
31 日 K I S H I D A I A 4 0 号 発行
6 月 10 日 談話会通信 N O. 11 (6 月号) 発行
13 日 東京蜘蛛談話会総会・例会 (大橋) 21 名参加
総会内容 (51・52 年運営委員選出・会費についての討議)
7 月 10 日 談話会通信 N O. 12 (7・8 月号) 発行
8 月 2~4 日 夏の観察・採集会 (伊豆半島・石廊崎)
15 日 第 2 回標本同定会 (大橋)
9 月 15 日 談話会通信 N O. 13 (9・10 月号) 発行
10 月 10 日 秋の観察・採集会 (千葉県八柱靈園) 19 名参加
11 月 5 日 談話会通信 N O. 14 (11・12 月号) 発行
12 月 26 日 三会合同例会 (大橋)

1977年

- 2 月 28 日 談話会通信 N O. 15 (1・2 月号) 発行
3 月 10 日 談話会通信 N O. 16 (3・4 月号) 発行
4 月 10 日 第 3 回標本同定会 (大橋)

—以上—

なお直接関係はしませんが、準備活動として運営委員会をひらいております。

※その他の蜘蛛団体の活動

1976年8月21・22日 東亜蜘蛛学会第8回大会が大阪にてひらかれる。

表紙に寄せて

小澤實樹

今までの表紙を飾ってくれていた蜘蛛たちの事情もここ数年でいさか変わった。「日本でたった一頭」と、その希少価値を誇っていたワクドツキジグモも、その後二頭目、三頭目が発見された。カトウツケオグモも、1975年初夏の対馬から、高野伸二先生につれられて上京、談話会員たちから大きな拍手を受けた。キムラグモは学会のマークにおさまって、永世名人の感である。それにトリフン連中もあちこちで元気な姿を多数見せてくれた。等々。その活動ぶりはなかなか見事だった。そして、このことは蜘蛛学会はもとより、東京蜘蛛談話会の活発な動きとシンクロするのである。

想えば、先号の表紙を描いたのが、1971年8月。談話会の夏期合宿でのクモ談議から、個体数の少いクモを捨い出し、大番主義で仕上げたのである。ところがその後、表紙制作者としては、「クモ世界」を観たり、聞いたりするたびに、表紙絵の貧弱さが目につき始め、年ごとに恥ずかしくなっていた。もちろん蜘蛛達のことを言うのではない。我が觀察の未熟さが、彼らに申し訳なく思うのである。その後毎年、足手まといな談話会員であることを自覚しながら、ついて歩るにきてきたが、おかげさまで、記録やスケッチもささやかながらたまつた。そして思った。大番主義の蜘蛛ばかりに、うつつをぬかしては困る。毎日逢える蜘蛛だからといって、その生態を見逃がしては、つき合いも薄くなってしまうことだろう。

オニグモ、コガネグモ、ハエトリグモ、コモリグモ、ヒメグモ、などの仲間にはよく逢える。もし、蜘蛛の価値がその数で決まるなら、最も安い連中かも知れない。しかし、それでも糸は銀色に光る。そして腹部の形も色や模様も決して安くはない。それぞれが、それぞれのロマンを秘めて、創りあげたのであろうか、深遠なその模様は、写すことすら難かしいのである。オニグモは、そのいづこかに妖艶な紋をきざみ、コガネグモの幾何学は、宇宙の運動とリズムの原点を教えてくれる。と言ったら言い過ぎなのだろうか。こうして、すべての蜘蛛たちは、自らの姿を自らで工夫し、その「孤」を誇りをしているのだろう。ともあれ、どれもが好きになる。希少な蜘蛛ばかりに熱をあげ、彼らの広い世界を見失ったら大変なのである。

ともかく蜘蛛たちは、どれもこれも千両役者である。まだまだクモづき合いの浅い筆者には、表紙を飾る蜘蛛を選ぶことは至難である。が、思いきって、再度恥を描くことにしたのである。昨年までの分類49科を文字でつづり、そのいくつかを図案化してみた。加えて、蜘蛛会員各位におもいを寄せて、子ぐもを散らした。どれかが、誰かである。さて、主役をきめることはできないが、談話会も10年。こんども、表紙の主役だけは「KISHIDAIJA」にゆずることにしよう。四つの星には、永遠のロマンをのせているように思う。そして、クモと人間のつき合い。蜘蛛の流す糸のような、謙虚な人ととの素晴らしいつき合い。この談話会のますますの発展を祈り、この会誌が今後とも蜘蛛学の良き協力者であることを願うのは、私だけではあるまい。

(1977年3月)

KISHIDAIJA No.41 1977, May

編 集 後 記

新しい表紙はいかがでしょうか。小澤氏が心を込めて書いてくださいました。この様なすばらしい表紙を持つ会誌はほかにあるでしょうか。長らく編集を担当しておられた小野氏がドイツに立ち、新たに熊田・山川両名に代りました。今回は原稿不足に四苦八苦する事もなかったのですが、しいて言えば編集に不慣れのために表紙との対抗上四苦八苦しました。しかし 原稿はすばらしく、かつ幅のあるものでしたので、全く原稿の良さに救われる思いです。40号が出てからそろそろ1年が過ぎようとしています“オーケー、まだか”と会員の皆様の声が聞こえる様です。赤字経営火の車は国鉄だけで結構、と会計も前年の穴埋めに成功し無事発行の運びとなりました。

編集としてはこれからDRAGLINEを大きくしてゆきたいと思っています。ちょっとした事でも原稿をお寄せ下さい。もちろん普通の原稿も大歓迎です。今年はもう一度12月頃に42号を発行する予定です。予定は未定にならないように皆様の原稿をお待ちしております。締切は10月30日です。

末筆ながら、印刷所さがしに編集にて我々以上に苦労をおかけした田中理恵氏にお礼申し上げます。

会計受付 〒185 東京都国分寺市本多1-6-6 新 海 栄一 0423(21) 0289
原稿受付 〒221 横浜市神奈川区片倉町199 熊 田 憲一 045(491) 0792

KISHIDAI A No. 41 1977年5月30日印刷 編集者 熊田憲一
山川守
1977年5月31日発行 発行者 萱嶋泉
発行所 東京蜘蛛談話会
〒191 東京都日野市豊田1896 萱嶋泉方
.....
印刷所 東京都町田市原町田4-9-7 富士工房